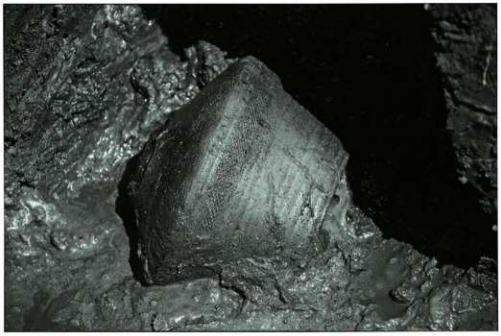
彦根市埋蔵文化財調査報告書第47集

川瀬馬場遺跡Ⅲ

－集合住宅建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査事業－



平成23年３月

彦根市教育委員会

目　次

例言
Ⅰ　はじめに ―――― 1
Ⅱ　位置と環境 ―――― 1
Ⅲ　発掘調査の成果 ―――― 9
　1　基本土層 ―――― 9
　2　検出遺構 ―――― 9
　3　出土遺物 ―――― 29
Ⅳ　おわりに ―――― 49
写真図版

例　言

1．本書は、彦根市教育委員会が平成21年度に集合住宅建設工事に伴って実施した、発掘調査の成果を納めたものである。
2．本調査の調査地は、彦根市川瀬馬場町字大横田1007－1番地に位置する。
3．本調査は、平成21年5月26日に試掘調査を実施したところ遺構を確認したため、同年7月21日～8月31日まで現地調査を実施し、平成22年5月24日～平成23年2月28日の間、資料整理を行った。
4．本調査は、彦根市教育委員会文化財部文化財課が実施した。平成21年度・平成22年度の調査の体制は下記のとおりである。

【平成21年度】
文化財部長：松岡一男　　文化財部次長（兼文化財課長）：谷口　徹
課長補佐（兼文化財係長）：久保達彦　　史跡整備係長：志萱昌貢
副　主　査：北川恭子　　主　　任：辻　嘉光
主　　任：高木絵美　　主　　任：池田隼人
主　　任：林　昭男　　技　　師：三尾次郎
技　　師：戸塚洋輔　　技　　師：田中良輔
技　　師：下高大輔

【平成22年度】
文化財部長：谷口　徹　　文化財部次長（兼文化財課長）：上田博司
課長補佐（兼史跡整備・文化財係長）：久保達彦
副　主　査：北川恭子　　主　　任：深谷　覚
主　　任：辻　嘉光　　主　　任：高木絵美
主　　任：池田隼人　　主　　任：林　昭男
主　　任：三尾次郎　　技　　師：戸塚洋輔
技　　師：田中良輔　　技　　師：下高大輔

5．本調査には以下の諸氏が参加した。
東郷美香（滋賀県立大学大学院生）・五十嵐由希・仲田周平（以上滋賀県立大学生）・市田政子・片山正範・久保亮二・清水啓邦・中川浩行・辻節男・中田鉄雄・浜野勲（以上作業員）
6．調査後の弥生土器の整理において滋賀県文化財保護協会伊庭功氏、松室孝樹氏のご教授を得た。
7．本書は林が執筆した。
8．本書で使用した方位は、平面直角座標第Ⅳ系の真北に、高さは東京湾平均海面に基づいている。
9．本調査で出土した遺物や写真・図面等は彦根市教育委員会で保管している。

Ⅰ　はじめに

本書は、民間開発による集合住宅建設工事に伴って実施した川瀬馬場遺跡（彦根市川瀬馬場町字大横田1007－１番地）の発掘調査の成果をまとめたものである。平成21年５月26日に試掘調査を実施したところ開発予定地全域（約1,205㎡）で遺物・遺構が確認されたため、開発業者と協議を行い、集合住宅の建物部分について本発掘調査の対象範囲とした。調査は、平成21年７月21日から平成21年８月31日まで現地で発掘調査を実施し、平成22年５月24日から平成23年２月28日まで整理調査を行い本報告書の刊行となった。

調査にあたっては、開発業者・土地所有者を始めとする関係者にご理解とご協力を賜った。厚くお礼を申し上げたい。

Ⅱ　位置と環境

〔地理的環境〕

川瀬馬場遺跡は、彦根市域の南西部、湖東平野に所在する遺跡である。湖東平野は、北東から南西に伸びる琵琶湖東岸湖岸線に沿って広がっている。この平野の北部には犬上川が、南部には愛知川が南東から北西に流下していて、これらが湖東平野の形成に大きく関与している。この両大河川が形成した扇状地の谷間を流れる宇曽川は、湖東平野中の独立山塊であ

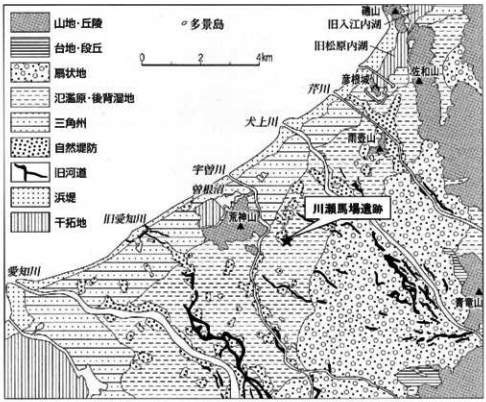


図１　彦根の自然地形（『新修彦根市史』第１巻より）

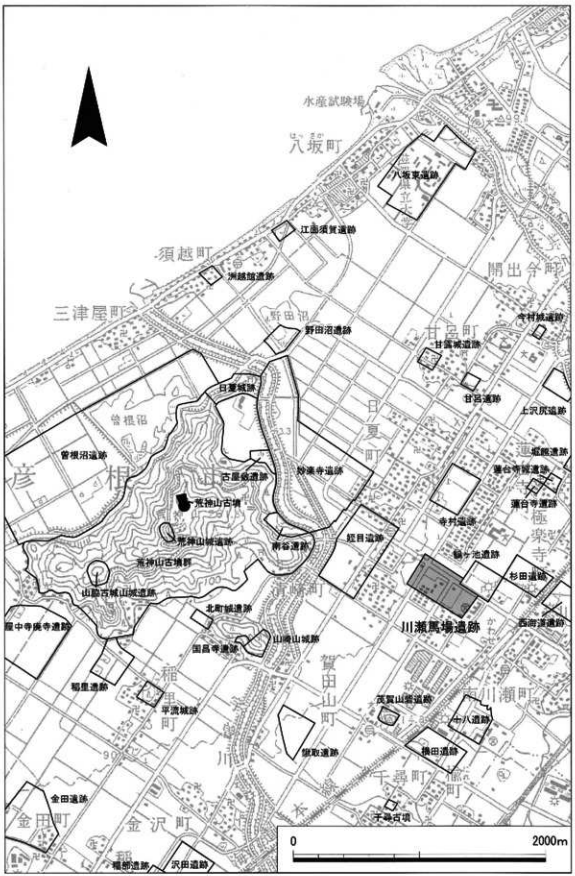


図２　川瀬馬場遺跡位置図

写真１　遺跡周辺の航空写真（平成21年12月１・２日撮影）

る荒神山の北東裾を迂回して琵琶湖に注いでいる。湖東平野は、湖岸線に平行しつつ山側へ順に浜堤、三角州、後背湿地、扇状地の４つの地形帯が分類されており、今回調査を実施した川瀬馬場遺跡は、荒神山の山裾から東へ約1.5km離れた宇曽川右岸、後背湿地帯中の自然堤防に位置する。湖岸線からは約2.5km離れ、標高は92～93mで、琵琶湖の水位（84.371m）とは約7.7～8.7mの比高がある。

〔歴史的環境〕

縄文時代　屋中寺廃寺で早期の高山寺式土器、福満遺跡で前期の大歳山式土器が確認されている。このように早期より遺物の出土は確認されるが、遺構を伴い、遺物量が増加するのは中期末から晩期に入ってからである。宇曽川流域ではなまず遺跡（愛荘町）においては、晩期後葉の土器棺や柱穴が確認されており、長野遺跡（愛荘町）においても同時期の土器が出土している程度で、縄文時代の遺跡数は多くない。

弥生時代　前期の様相は不明瞭だが、芹川流域の大岡遺跡（多賀町）や犬上川流域の尼子遺跡・北落遺跡・金屋遺跡（甲良町）などの扇状地で土器が出土している。これらは、縄文時代後・晩期から継続している立地であるが、これ以降継続するものではない。市域では竹ヶ鼻廃寺や稲里遺跡で前期の土器の出土が確認されている。中期以降は、琵琶湖岸の沖積低地部に遺跡の分布は移動する。宇曽川流域には、中期の集落遺跡である川瀬馬場遺跡、同じく集落遺跡で中期から後期にまで及ぶ妙楽寺遺跡がある。犬上川流域では、後期の方形周溝墓などが確認されている堀南遺跡、同じく後期で竪穴住居を伴った福満遺跡がある。このように、中期以降宇曽川・犬上川流域では、扇状地の扇端より下流の沖積低地部に集落が展開する傾向にある。これは、扇状地の扇端部における湧水の灌漑利用との関係が考えられる。

古墳時代　古墳時代では、前期末に荒神山山頂付近に大型の前方後円墳である荒神山古墳が築造される。その規模・立地などから、愛知郡・犬上郡を含む湖東平野北部を代表する首長墓と考えられる。同時期の湖東平野北部に広がる集落遺跡としては、藤丸遺跡・品井戸遺跡・福満遺跡・堀南遺跡・横地遺跡・段の東遺跡・木曽遺跡（多賀町）・土田遺跡（多賀町）などがある。そして、中・後期段階になって、正法寺古墳群・葛籠北遺跡・横地遺跡・神ノ木遺跡・段ノ東遺跡・輪掛山などに古墳が築造されるようになる。川瀬馬場遺跡周辺地域では、愛知川と宇曽川に挟まれた沖積地で集落の形成が顕著となる。下流域の普光寺遺跡では初頭から前期、芝原遺跡では前期を中心に確認されており、中流域の稲部遺跡や長野遺跡（愛荘町）でも同時期の集落が形成される。これらの遺跡は中期になると衰退し、この時期の遺跡数は少ない。後期になると、芝原遺跡で再び集落が形成され、なまず遺跡（愛荘町）で６世紀末頃の切妻大壁造建物が検出されていることは特筆され、渡来系氏族との関係が推測される。

白鳳～奈良時代　７世紀後半になると、新しく伝来した仏教の影響の下に、権力の象徴が古墳から寺院へと変化する。彦根市域でもこれら古代寺院の比定地が６箇所想定されている。犬上川流域の高宮廃寺・竹ヶ鼻廃寺・八坂東遺跡、愛知川流域の屋中寺廃寺・下岡部廃寺・

普光寺廃寺である。彦根市域における白鳳期の集落遺跡の状況は、未だ明らかになっていないが、奈良・平安時代に入ると、品井戸遺跡・竹ヶ鼻廃寺・福満遺跡・法士南遺跡などで掘立柱建物跡が検出されているため、これらのなかに前代の遺構が含まれている可能性がある。

川瀬馬場遺跡周辺地域では、奈良時代の遺跡は顕著でなく、愛知川に近い国領遺跡で確認される程度である。しかし、荒神山北側の東大寺領墾流荘の存在は特筆されるであろう。正倉院に残る墾田地図によると、愛知、犬上両郡にまたがる70町が東大寺に施入され、墾流荘が成立した。また、延久2（1070）年の『近江国弘福寺領庄田注進状』により愛知郡2条7里・8里・3条16里に弘福寺領平流荘が存在したことが記されており、さらに和銅2（709）年の『弘福寺水陸田目録』に「依智郡田忘拾忘町忘段参拾陸歩」とみえることから、弘福寺領平流荘は8世紀初頭には成立していたものと考えられている。具体的な所在地としては、荒神山南麓の下岡部廃寺と屋中寺廃寺に挟まれた地と推定されている。また、この時期の宇曽川流域では、少し上流側の長野遺跡・なまず遺跡・沓掛遺跡（愛荘町）を中心に遺跡は展開する。これらの遺跡の近くには古代東山道に比定される近世中山道が通り、愛知郡衙の存在も想定されており、当該期の中心的役割をなした地域と考えられている。平安時代になると国領遺跡で前代に引き続き集落が営まれるが、普光寺廃寺や芝原遺跡でも遺構・遺物が確認されるようになる。特に、芝原遺跡では京都産緑釉陶器皿・畿内産黒色土器碗・灰釉陶器皿の転用硯がまとまって出土しており、一般集落とは異なる様相がみてとれる。

〔川瀬馬場遺跡の概要と既往調査〕

川瀬馬場遺跡は、彦根市川瀬馬場町から日夏町にかけて所在する弥生時代中期の遺跡である。現在、県立河瀬高等学校が所在するが、遺跡はその学校の敷地と北西側一帯に広がっている。昭和56年（1981）に上記高等学校建設に伴って実施した滋賀県教育委員会の試掘調査により発見された。これまで3度にわたる発掘調査が実施されている。1度目の発掘調査は、上記高等学校建設に伴うもので、試掘調査の翌年、昭和57年度（1982）に滋賀県教育委員会（県1次調査）により実施された。2度目の発掘調査は、昭和62年度（1987）に宅地造成工事に伴い彦根市教育委員会（市1次調査）により実施された。3度目の発掘調査は、平成5年度（1993）に同じく宅地造成工事に伴い彦根市教育委員会（市2次調査）により実施された。これまでの3度の発掘調査により、川瀬馬場遺跡は、弥生時代中期中葉から後葉にかけての集落遺跡ということが判明している。またその特徴として、掘立柱建物のみで構成された集落遺跡という点が上げられる。今回、本報告書で報告する調査は、4度目の発掘調査（市3次調査）となる。調査地は、市2次調査西隣で、遺跡包蔵地の南西端になる。以下、既往調査成果について概観する。

≪県1次調査≫

川瀬馬場遺跡における初めての発掘調査である。昭和57年度に県立河瀬高等学校建設工事に伴い、滋賀県教育委員会によって実施された。調査地は今回（市3次調査）の調査地の東

図３　川瀬馬場遺跡発掘調査位置図

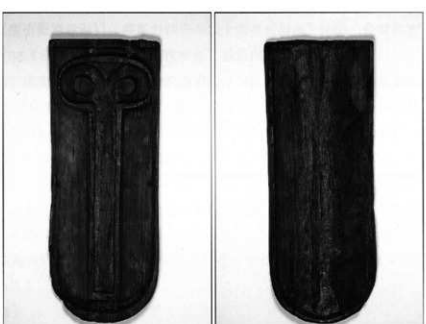
調査番号	調査地 調査面積（㎡） 調査原因	調査期間	調査主体	主な検出遺構・遺物
1	川瀬馬場町608他 約3,500（発掘調査面積） 県立河瀬高等学校建設工事	1982年４月 ～ 1982年６月	滋賀県教育委員会 （県１次調査）	主な遺構：掘立柱建物、溝、土坑 主な遺物：弥生土器、木器、石器（石鏃・環状石斧・砥石）、土製品（人形土製品） 主な時期：弥生時代中期
2	日夏町3729他 約1,200（発掘調査面積） 宅地造成工事	1987年12月 ～ 1987年２月	彦根市教育委員会 （市１次調査）	主な遺構：掘立柱建物、溝、土坑 主な遺物：弥生土器、木器（用途不明木製板・高杯・鍬・又鍬・杓子未製品・弓）、石器（石斧・砥石） 主な時期：弥生時代中期
3	川瀬馬場町1006－１他 約500（発掘調査面積） 宅地造成工事	1993年12月 ～ 1994年２月	彦根市教育委員会 （市２次調査）	主な遺構：掘立柱建物、溝、土坑 主な遺物：弥生土器 主な時期：弥生時代中期
4	川瀬馬場町1007－１他 約450（発掘調査面積） 集合住宅建設工事	2009年７月 ～ 2009年８月	彦根市教育委員会 （市３次調査）	主な遺構：掘立柱建物、溝、土坑 主な遺物：弥生土器、木器（柱状）、石器（石鏃・石斧・砥石・石剣） 主な時期：弥生時代中期

表１　川瀬馬場遺跡発掘調査一覧

側で、現在の県立河瀬高等学校のグランドに位置する。弥生時代中期中葉から後葉の集落跡が確認された。検出された遺構は掘立柱建物14棟、土坑、溝などである。出土遺物は、弥生土器、石器、石製品、木製品、人形土製品などである。弥生土器は第Ⅲ様式から第Ⅳ様式までであるが、その大半が第Ⅳ様式に属す土器である。特筆すべき遺物として、人形土製品が挙げられる。人面を立体的にあらわした土偶状の遺物で、大きさは高さ5.3cm、頭部長2.2cm、幅2.9cm、奥行2.5cm、体部長3.1cm、幅3.8cm、奥行3.8cmを測り、重さは57.96gと小ぶりである。掘立柱建物の柱穴からの出土である。集落の性格を検討する上で、重要な資料と言えるであろう。

≪市１次調査≫

昭和62年度（1987）に宅地造成工事に伴い、彦根市教育委員会によって実施された。調査地は今回（市３次調査）の調査地の北西側に位置する。県１次調査と同じく、弥生時代中期中葉から後葉の集落跡が確認された。検出された遺構は掘立柱建物21棟、土坑、溝などである。出土遺物は、弥生土器、石器、石製品、木製品などである。弥生土器は第Ⅲ様式から第Ⅳ様式までであるが、その大半が第Ⅳ様式に属す土器である。特筆すべき遺物として、用途不明の不思議な木製品が挙げられる（写真２）。長さ22.4cm、巾8.5cm、厚さ２cmのU字形をした精巧に加工された木製板である。板の外縁は、表裏のどちらも浮き彫りで縁取りし、表面には二つの円を連結した双頭渦文から、直線を伸ばした文様を深く彫り込んでいる。そして、この文様にも縁取りがある。外縁と文様の縁取りには７箇所に小さな穴があけられている。裏の縁取りを口に合わせる細工と見て、容器の蓋と考えたいところだが、このような形の容器は類例がない。溝からの出土である。



（表面）　　（裏面）

写真２　市１次調査出土の木製品

≪市２次調査≫

平成５年度（1993）に宅地造成工事に伴い、彦根市教育委員会によって実施された。調査地は今回（市３次調査）の調査地の東側に位置し、現在の県立河瀬高等学校グランド沿いの住宅地に位置する。これまでの調査と同じく、弥生時代中期中葉から後葉の集落跡が確認された。検出された遺構は掘立柱建物24棟、土坑、溝などである。出土遺物は、弥生土器、石器、石製品などである。弥生土器は第Ⅲ様式から第Ⅳ様式までであるが、その大半が第Ⅳ様式に属す土器である。

以上、これまでに実施された３度にわたる発掘調査について概観した。これら３次にわたる調査についてまとめると、川瀬馬場遺跡は弥生時代中期中葉から後葉の集落跡で、掘立柱建物のみで構成されるという特徴がある。これまでの調査で確認された掘立柱建物は合計59棟にものぼるが、それらの配置にはさほど規則性は認められない。集落の範囲は川瀬地区・日夏地区を合わせると、最低でも東西150m以上が想定でき、ある程度大きな集落であったことは間違いがないであろう。いずれにせよ、当該期の遺跡の少ない湖東平野中央部においては、集落のあり方など多くの情報をもたらしてくれる数少ない遺跡のひとつである。

〔参考文献〕

滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会　1984『馬場遺跡発掘調査報告書』
滋賀県立安土城考古博物館　2006『扇状地の考古学』
彦根市　1960『彦根市史』上冊
彦根市　2007『新修彦根市史』第１巻通史編　古代・中世
彦根市教育委員会　1988『馬場遺跡』彦根市埋蔵文化財調査報告第15集
彦根市史考古部会　2004「馬場遺跡出土の弥生時代遺物」『「新修彦根市史」編さんにともなう彦根市内遺跡・遺物調査報告書』
彦根市教育委員会　2010『荒神山古墳』彦根市文化財調査報告書第２集

Ⅲ　発掘調査の成果

1　基本土層

調査地は、宇曽川下流右岸後背湿地帯中の自然堤防の標高92～93m前後で、川瀬馬場町市街地に位置する。調査対象地は休耕田であるが、周辺は近年宅地化が進んできており、これまでも宅地造成工事に伴い発掘調査を実施している。今回の調査地は、市２次調査を実施した西隣で湧水の激しい場所である。

基本土層として３層の堆積を確認した。第１層が表土としての褐灰色粘質土（近現代耕作土）、第２層が灰黄褐色粘質土（旧耕作土）、第３層が明黄褐色粘質土（遺構面）である。遺構面は現地表面から約0.5m下げたあたりで検出でき、概ね標高92m前後である。調査区全域この基本土層の堆積状況であるが、遺構面は南西に向かって地山が砂質化しやや軟弱な地盤となり、遺構も少なくなる傾向が見られた。

2　検出遺構

今回の調査は、集合住宅建設工事に伴うものであり、開発業者との協議の結果、本調査の範囲は集合住宅建設部分（建物本体）約450㎡とした。調査の結果、これまでの調査成果と同じく弥生時代中期中葉から後葉の集落跡が確認された。検出された遺構は掘立柱建物６棟、土坑、柱穴、溝などである。今回の調査でも集落を構成する建物は掘立柱建物のみであった。以下、検出遺構の概要を報告する。

なお、今回の調査では、調査区全域で柱穴と推定される遺構を確認したが、本報告では遺構記号を付けるにあたり、建物プランを復原できたものを『SP』としそれ以外を『SK』としたのでご了解いただきたい。

掘立柱建物（SB１～SB６）

調査区全域で柱穴を検出したが、特に北東側で密度が高かったといえる。柱穴は概ね直径30～40cmの平面円形を呈するもので、残存深度は20～30cmを測るものが大部分であるが、中には大型のものも確認された。また、柱根の残存しているものも少数確認した。限られた調査区ではあるものの多数の柱穴が検出されたため、建物のプラン復原にあたっては、不整形な形で建物跡とした場合、収拾がつかなくなるおそれがあるため、比較的柱筋が揃い、柱間がほぼ等距離をなし、かつ梁行と桁行の軸線が直交することを原則として建物跡を推定した。その結果６棟の建物跡を復原することができた。ただし、柱穴が検出できなかった所や建物プランが調査区の外側に伸びる可能性も考えられるため、ここに上げた以上の建物があったと思われる。

SB１（図６）

今回の調査区で一番南西側から検出された掘立柱建物である。棟の方位はN－８°－Wを示す。梁行１間（約3.3～3.4m）×桁行１間（約3.7～3.9m）の南北棟建物である。床面積は

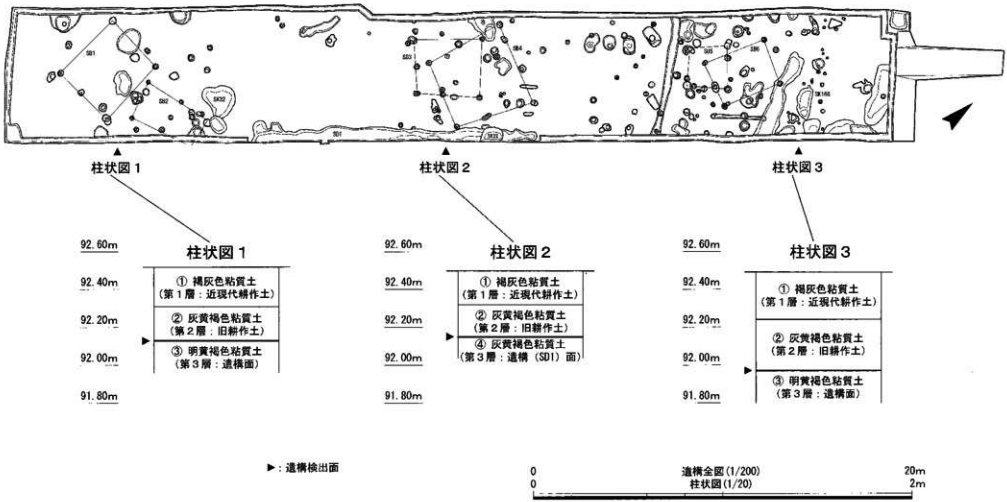
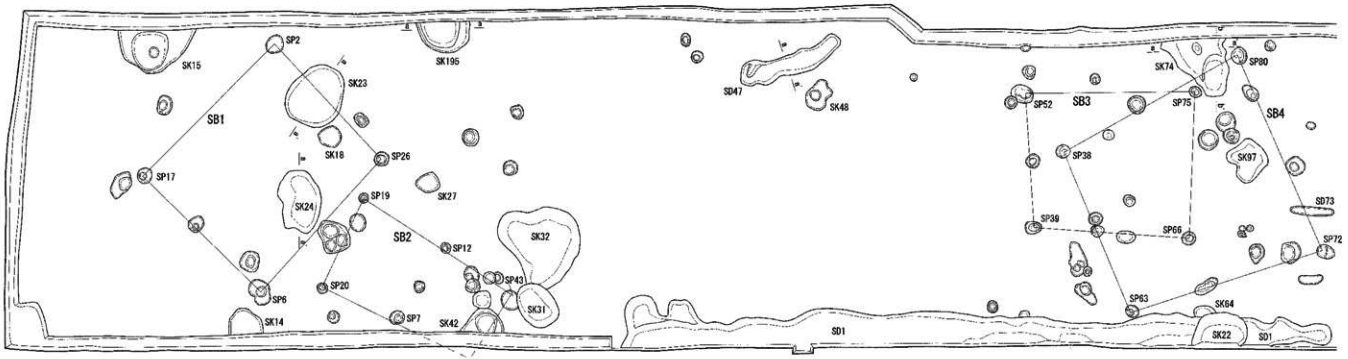
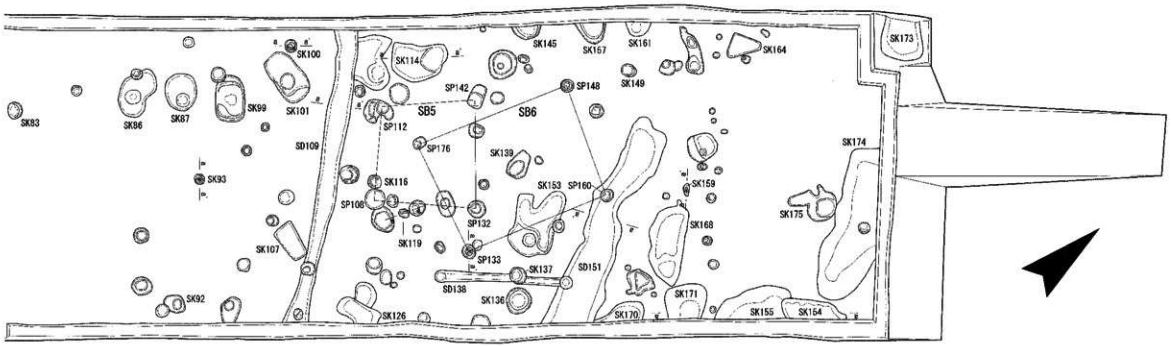

柱状図1
柱状図2
柱状図3
92.60m
92.40m
92.20m
92.00m
91.80m
① 褐灰色粘質土
（第1層：近現代耕作土）
② 灰黄褐色粘質土
（第2層：旧耕作土）
③ 明黄褐色粘質土
（第3層：遺構面）
④ 灰黄褐色粘質土
（第3層：遺構（SD1）面）
▶：遺構検出面
0
20m
遺構全図(1/200)
0
2m
柱状図(1/20)

図4　遺構全図・基本層序


SB1
SB2
SB3
SB4
SP2
SP17
SP6
SP14
SP7
SP20
SP19
SP26
SP12
SP43
SP52
SP38
SP39
SP66
SP75
SP80
SP72
SP63
SK15
SK23
SK18
SK24
SK27
SK32
SK31
SK42
SK195
SK47
SK48
SK74
SK97
SK64
SK22
SD1
SD73


SB5
SB6
SK100
SK101
SK99
SK87
SK86
SK83
SK93
SK92
SK107
SD109
SK114
SP142
SP112
SP176
SP148
SK145
SK157
SK161
SK149
SK164
SK173
SK174
SK139
SK116
SP108
SK119
SP132
SP133
SK153
SP160
SK159
SK168
SK175
SK137
SD138
SK136
SD151
SK171
SK170
SK155
SK154
SK126

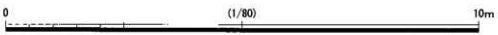

0
(1/80)
10m

図5　遺構全図

約12.92㎡を測る。柱間は梁側では約3.3～3.4m、桁側では約3.7～3.9mである。柱穴は、SP 2・SP 6・SP17・SP26で構成される。掘り方の平面形は円形・楕円形で直径約30～50cm、残存深度は約15～30cmを図る。柱痕は平面円形で直径約10～20cmを測る。

SB 2（図 7）

SB 1の北東側から検出された掘立柱建物である。棟の方位はN－72°－Eを示す。今回の調査では、調査区端にかかる形で検出されたため、建物全体のプランは判明しなかったが、検出できている範囲では梁行 1 間以上（約2.0m以上）×桁行 2 間以上（約3.7m以上）の東西棟建物である。床面積は約7.40㎡以上を測る。柱間は梁側では約2.0m、桁側では約1.7～2.0mである。柱穴は、SP 7・SP12・SP19・SP20・SP43で構成される。掘り方の平面形は円形で直径約20～45cm、残存深度は約20～30cmを測る。柱痕は、平面円形で直径約10～20cmを測る。

SB 3（図 8）

調査区中央付近で検出されたSD 1と平行する掘立柱建物で、SB 4と重複する。棟の方位はN－40°－Eを示す。梁行 1 間（約2.9～3.1m）×桁行 1 間（約3.4～3.7m）の南北棟建物である。床面積は約10.50㎡を測る。柱間は梁側では約2.9～3.1m、桁側では約3.4～3.7mである。柱穴は、SP39・SP52・SP66・SP75で構成される。掘り方の平面形は円形・楕円形で直径約25～45cm、残存深度は約25～30cmを測る。柱痕は平面円形で直径約15～30cmを測る。

SB 4（図 9）

調査区中央付近で検出された掘立柱建物で、SB 3と重複する。棟の方位はN－15°－Eを示す。梁行 1 間（約3.7～4.4m）×桁行 1 間（約4.3m）の南北棟建物である。床面積は約17.20㎡を測る。柱間は梁側では約3.7～4.4m、桁側では約4.3mである。柱穴は、SP38・SP63・SP72・SP80で構成される。掘り方の平面形は円形・楕円形で直径約25～40cm、残存深度は約20～35cmを測る。柱痕は平面円形で直径約15～30cmを測る。

SB 5（図10）

調査区北東側で検出された掘立柱建物で、SB 6と重複する。棟の方位はN－40°－Eを示す。梁行 1 間（約2.0～2.3m）×桁行 1 間（約2.0～2.2m）の南北棟建物である。床面積は約4.41㎡を測る。柱間は梁側では約2.0～2.3m、桁側では約2.0～2.2mである。柱穴は、SP108・SP112・SP132・SP142で構成される。掘り方の平面形は円形・隅丸方形・不整形と様々であるが、円形のものは直径約35～65cm、残存深度は約30～35cmを測る。柱痕は平面円形で直径約25～35cmを測る。

SB 6（図11）

調査区北東側で検出された掘立柱建物で、SB 5と重複する。棟の方位はN－19°－Eを示す。梁行 1 間（約2.5～2.6m）×桁行 1 間（約3.3～3.4m）の南北棟建物である。床面積は約8.25㎡を測る。柱間は梁側では約2.5～2.6m、桁側では約3.3～3.4mである。柱穴は、SP133・SP148・SP160・SP176で構成される。掘り方の平面形は円形・楕円形で直径約25～30m、残

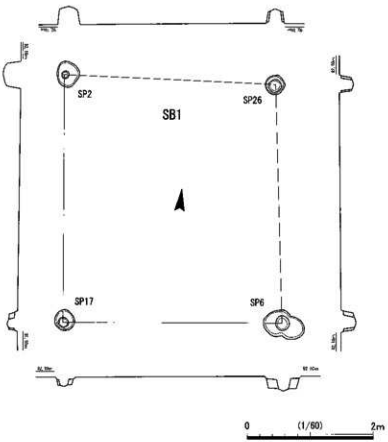


図６　掘立柱建物（SB１）平面図・断面図

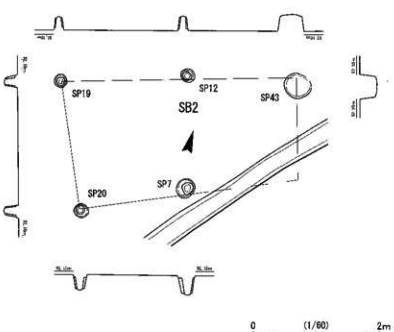


図７　堀立柱建物（SB２）平面図・断面図

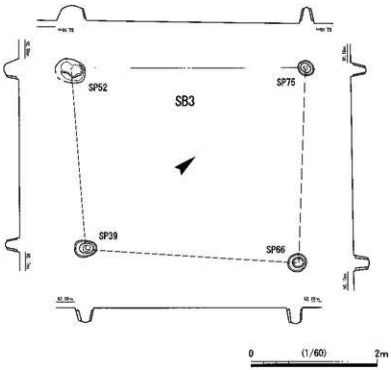


図８　堀立柱建物（SB３）平面図・断面図

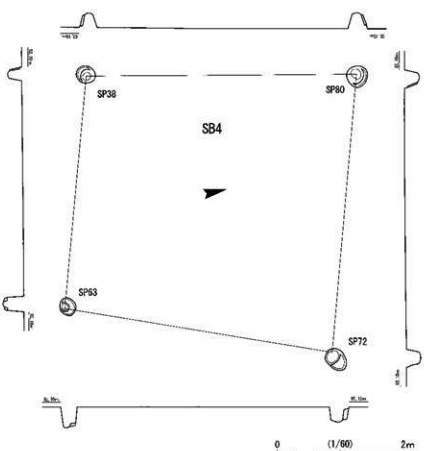


図９　堀立柱建物（SB４）平面図・断面図

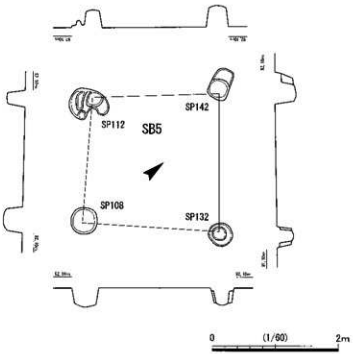


図10　掘立柱建物（SB５）平面図・断面図

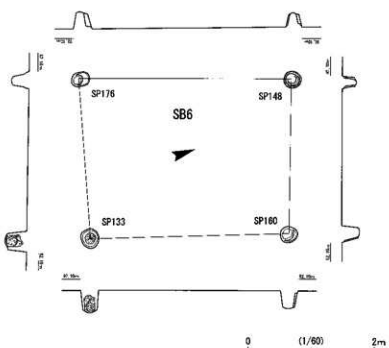


図11　掘立柱建物（SB６）平面図・断面図

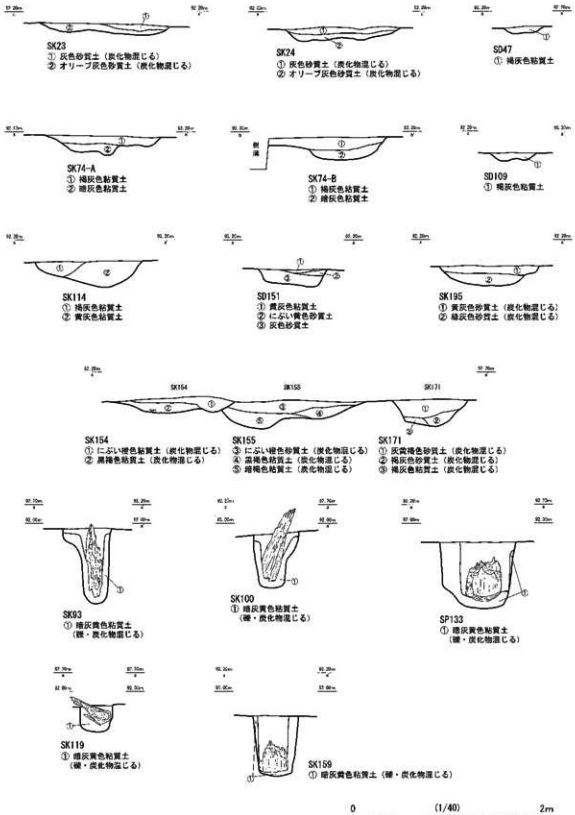

SK23
① 灰色砂質土（炭化物混じる）
② オリーブ灰色砂質土（炭化物混じる）
SK24
① 灰色砂質土（炭化物混じる）
② オリーブ灰色砂質土（炭化物混じる）
SD47
① 褐灰色粘質土
SK74-A
① 褐灰色粘質土
② 暗灰色粘質土
側溝
SK74-B
① 褐灰色粘質土
② 暗灰色粘質土
SD109
① 褐灰色粘質土
SK114
① 褐灰色粘質土
② 黄灰色粘質土
SD151
① 黄灰色粘質土
② にぶい黄色砂質土
③ 灰色砂質土
SK195
① 黄灰色砂質土（炭化物混じる）
② 暗灰色砂質土（炭化物混じる）
SK154
SK155
SK171
SK154
① にぶい橙色粘質土（炭化物混じる）
② 黒褐色粘質土（炭化物混じる）
SK155
③ にぶい橙色砂質土（炭化物混じる）
④ 黒褐色粘質土（炭化物混じる）
⑤ 暗褐色粘質土（炭化物混じる）
SK171
① 灰黄褐色砂質土（炭化物混じる）
② 褐灰色砂質土（炭化物混じる）
③ 褐灰色粘質土（炭化物混じる）
SK93
① 暗灰黄色粘質土
（礫・炭化物混じる）
SK100
① 暗灰黄色粘質土
（礫・炭化物混じる）
SP133
① 暗灰黄色粘質土
（礫・炭化物混じる）
SK119
① 暗灰黄色粘質土
（礫・炭化物混じる）
SK159
① 暗灰黄色粘質土（礫・炭化物混じる）
0
(1/40)
2m

図12　各遺構断面図

存深度は約20～40cmを測る。柱痕は平面円形で直径約20～35cmを測る。SP133には、柱根が残存していた。

溝

今回の調査では、大小数本の溝を検出しているが、特にSD１では纏まった量の遺物が出土した。

SD１（図13）

調査区中央付近、南東壁に沿うような位置で検出された溝である。長さ約15m、最大幅約80cm、深さ約35cmで断面が逆台形状を呈している。SB３と平行する形で直線的に伸びる溝で、遺構の北東付近でSK22に切られる。溝の堆積土は概ね暗灰色粘質土や黒色粘質土で、底部付近には炭化物が混じる。纏まった量の弥生土器、石器、石製品が出土している。出土している弥生土器はそれほど磨耗していない。今回の調査で最も纏まった量の遺物が出土した遺構である。

SD47

SB２の北側で検出された溝である。長さ約2.3m、幅約43cm、深さ約16cmで断面形態は緩やかな椀状を呈している。堆積土は褐灰色粘質土である。遺物は少量であったが、弥生土器の小片が出土している。

SD109（図12）

SB５の南西側で検出された溝である。SB５にほぼ平行する方向に伸びている。調査区外に伸びているため、長さは不明だが、幅約30～50cm、深さ約７cmで断面形態は緩やかな椀状を呈している。堆積土は褐灰色粘質土である。遺物は少量であったが、弥生土器の小片が出土している。

SD151（図12）

SB６の北東側で検出された溝である。SB６に切られる。調査区外に伸びているため、長さは不明だが、幅は約60～100cm、深さ約20cmで断面形態は緩やかな椀状を呈している。堆積土は、第１層：黄灰色粘質土、第２層：にぶい黄色砂質土、第３層：灰色砂質土である。遺物は弥生土器が出土している。

土坑・柱穴

調査区全域で土坑や柱穴を検出したが、特に北東側で密度が高い。SK32で纏まった量の弥生土器を出土している。

SK15・SK23・SK24（図12）

調査区南西側で、平面形態や深さなどが近似した土坑が検出されている。平面形態は円形で直径約1.0～1.4m、深さ約15cmと浅く、断面形態は緩やかな椀状を呈している。堆積土は、いずれも第１層：灰色砂質土、第２層：オリーブ灰色砂質土である。遺物も弥生土器が出土しているがそれほど多くはない。

SK195（図12）

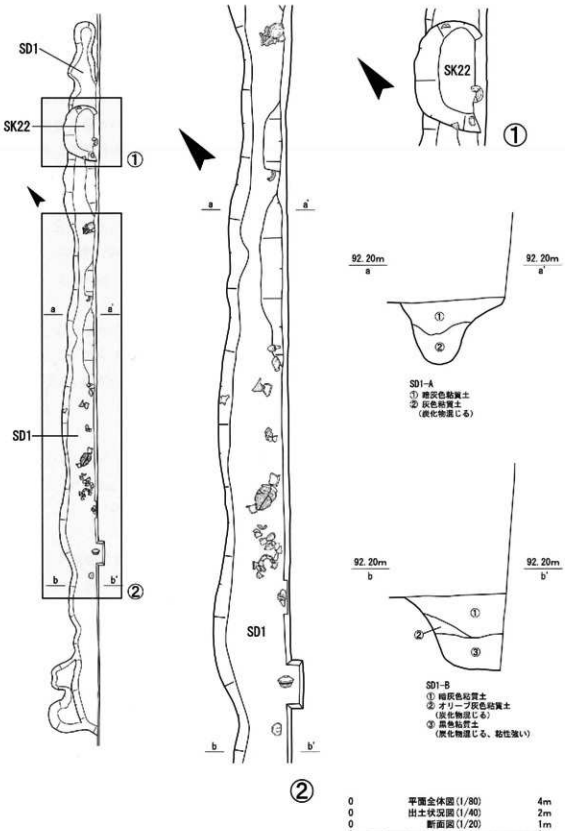


図13 溝（SD１）・土杭（SK22）遺物出土状況図・断面図

SK15・SK23・SK24の北側で検出された土坑で、形態も似ている。平面形態は円形で直径約1.1m、深さ約8cmと浅く、断面形態は緩やかな椀状を呈している。堆積土は、第1層：黄色砂質土、第2層：緑灰色砂質土である。遺物は出土していない。

SK32（図14）

SK15・SK23・SK24の北東側で検出された土坑である。SK31に切られる。遺構の形態としてはSK15・SK23・SK24と似ている。しかし、この遺構からは、まとまった量の遺物と多量の炭化物が確認されており、SK15・SK23・SK24とは遺構の性格が異なる可能性がある。平面不定形で深さも約25cmと浅く、断面形態は緩やかな椀状を呈している。堆積土は、第1層：暗灰色砂質土、第2層：黒色粘質土である。非常に浅い遺構であるが、弥生土器の出土

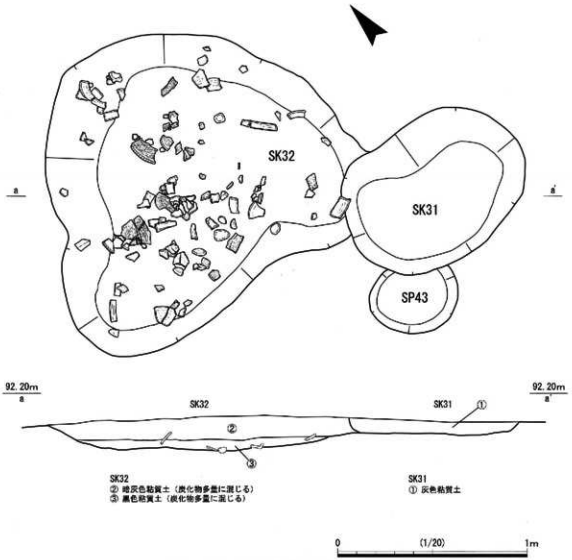


図14　土杭（SK32）遺物出土状況図・断面図

景は多い。

SK74（図12）

調査区中央部の北西壁付近で検出された土坑である。SB 4 と重複する。遺構が調査区外に広がっているため平面形態・規模は不明で、深さも約23cmと浅い。堆積土は、第 1 層：褐灰色粘質土、第 2 層：暗灰色粘質土である。遺物は弥生土器が出土しているがそれほど多くはない。

SK97

調査区中央付近でSB 3 の北東側で検出された土坑で、SB 4 と重複する。平面形態は不整形で長軸約72cm、短軸約62cm、深さ約13cmで、断面形態は逆台形状を呈している。堆積土は、褐灰色砂質土である。遺物は弥生土器が出土しているがそれほど多くはない。

SK86・SK87・SK99・SK101

SB 4 の北側で検出された土坑である。いずれも平面形態は楕円形で長軸約1.1m、短軸約0.6m、深さ約20～40cmを測る。堆積土は、いずれも第 1 層：褐灰色粘質土、第 2 層：オリーブ灰色粘質土である。遺物はいずれも弥生土器が少量出土している。構築の用途や意図は不明であるが、調査区外に掘立柱建物のプランが広がっているのかもしれない。もし、そうであるならば、柱穴の掘り方が他の建物より少し大きく、大型の建物が想定できるかもしれない。

SK92

SD109の南西側で検出された土坑で、SK91に切られている。平面形態は楕円形で長径約44cm、短径約35cm、深さ約23cmで、断面形態は逆台形状を呈している。堆積土は、褐灰色粘質土である。遺物は少量であったが、弥生土器の小片が出土している。

SK114（図12）

SB 5 の北西側で検出された土坑である。平面形態は不整形で長軸約116cm、短軸約75cm、深さ約42cmで、断面形態は緩やかな椀状を呈している。堆積土は、暗灰黄色粘質土である。遺物は少量であったが、弥生土器の小片が出土している。

SK126

SB 5 の南東側で検出された土坑である。遺構が調査区外に広がっているため平面形態・規模は不明で、深さは約31cmを測る。断面形態は逆台形状を呈している。堆積土は、褐灰色粘質土である。遺物は少量であったが、弥生土器の小片が出土している。

SK139

SB 6 の中央で重複する形で検出された土坑である。平面形態は不整形で長軸約59cm、短軸約38cm、深さ約15cmで、断面形態は緩やかな椀状を呈している。堆積土は、暗灰黄色粘質土である。遺物は少量であったが、弥生土器の小片が出土している。

SK149

SB 6 の北側で検出された土坑である。平面形態は円形で直径約32cm、深さ約15cmで、断

面形態は緩やかな椀状を呈している。堆積土は、黒褐色粘質土である。遺物は少量であったが、弥生土器の小片が出土している。

SK168（図15）

SB６の北東側で検出された土坑である。平面形態は楕円形で長幅約1.7m、短幅約0.8m、深さ約20cmと浅く、断面形態は緩やかな椀状を呈している。堆積土は、黒褐色粘質土の単一層である。SK32に比べると少景ではあるものの、ある程度まとまった量の弥生土器が出土しており、掘立柱建物に隣接すること、遺構の形態なども勘案すると、SK32と非常に様相が近いようである。同一の用途があったのかもしれない。

SK154・SK155・SK171（図12）

調査区北東側、南東壁沿いで検出された土坑である。いずれも調査区外に広がっているため、平面形態など不明だが深さは約30～40cmを測る。いずれの堆積土にも炭化物がやや多めに混じる。遺物は弥生土器が出土しているがそれほど多くない。

SK175

調査区北東側で、SK174の南西側に検出された土坑である。SK174を切っている。平面形態は不整形で長幅約103cm、短幅約54cm、深さ約13cmで、断面形態は緩やかな椀状を呈している。堆積土は、礫混じりの黒褐色粘質土である。遺物は少量であったが、弥生土器の小片

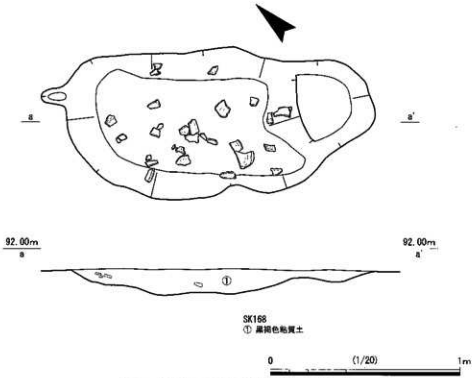


図15　土坑（SK168）遺物出土状況図・断面図

が出土している。

SK173

調査区の最も北西側で検出された土坑である。遺構が調査区外に広がっているため平面形態・規模は不明で、深さは約18cmを測る。断面形態は逆台形状を呈している。堆積土は、黒褐色粘質土である。遺物は弥生土器が出土しているがそれほど多くない。

SK68・SK93・SK100・SK119・SP133・SK159（図12）

今回の調査で柱根が残存していたのは6箇所であった。そのうち、建物プランの判明したのがSB6に伴うSP133のみであった。いずれも、掘り方の平面形は円形・楕円形で直径約20～30cm、残存深度約10～80cmを測る。残存深度にややバラつきが見られる。柱痕は平面円形で直径約15～40cmを測る。いずれの柱根も木口には加工痕が認められる。

SK22（図13）

調査区中央付近で、SD1を切る形で検出された土坑である。遺構が調査区外に広がっているため平面形態・規模は不明で、深さは約37cmを測る。断面形態は緩やかな椀状を呈している。堆積土は、第1層：黄灰色砂質土、第2層：灰色粘質土、第3層：暗灰黄色砂質土、第4層：オリーブ黒色粘質土である。出土遺物は、黒色土器などで今回の調査区で確実に弥生時代以降の唯一の遺構である。

表２－１　遺構一覧

遺構	平面形	規模（cm）			出土遺物	備考	挿図	写真図版
		長さ（長軸）	幅（短軸）	深さ				
SD1	…	1505.0	(80.0)	34.4	弥生土器、石錐、石剣、砥石	SK22に切られている	13	6･7･8
SP2	円	41.0	36.0	5.5	弥生上器	SB1を構成する柱穴	6	5
SK3	楕円	40.0	31.0	10.2	弥生土器			
SK4	円	43.0	40.0	13.6	弥生上器			
SK5	円	37.0	33.0	18.8	弥生土器			
SP6	楕円	58.0	32.0	20.8	弥生土器	SB1を構成する柱穴	6	5
SP7	円	30.0	28.0	28.0	弥生土器	SB2を構成する柱穴	7	5
SK8	円	26.0	26.0	23.6	弥生土器			
SK9	円	37.0	34.0	13.9	弥生土器			
SK10	円	37.0	37.0	25.4	弥生土器	SK42を切っている		
SK11	円	26.0	25.0	18.4	弥生土器	SK44を切っている		
SP12	円	22.0	21.0	20.3	弥生土器	SB2を構成する柱穴	7	5
SK13	円	35.0	29.0	14.4	弥生土器			
SK14		(55.0)	73.0	4.7	弥生土器			
SK15	—	(91.0)	164.0	14.8	弥生土器			
SK16	楕円	64.0	35.0	23.4				
SP17	円	33.0	30.0	12.6		SB1を構成する柱穴	6	5
SK18	円	48.0	44.0	14.2				
SP19	円	21.0	19.0	7.2		SB2を構成する柱穴	7	5
SP20	円	22.0	21.0	10.0		SB2を構成する柱穴	7	5
SK21	楕円	32.0	25.0	14.1				
SK22	—	114.0	(64.0)	37.0	黒色土器、弥生上器	SD1を切っている	13	10
SK23	円	140.0	115.0	13.8	弥生土器			
SK24	不整	134.0	81.0	12.0	弥生上器			
SK25	不整	76.0	55.0	8.4				
SP26	円	30.0	30.0	19.4	弥生上器	SB1を構成する柱穴	6	5
SK27	楕円	51.0	41.0	19.9	弥生土器			
SK28	円	25.0	21.0	16.2				
SK29	円	29.0	28.0	13.4		SK30を切っている		
SK30	円	35.0	30.0	15.9		SK29に切られている		
SK31	楕円	100.0	74.0	9.2	弥生土器	SK32・43を切っている	14	9
SK32	不整	182.0	151.0	24.7	弥生上器、砥石	SK31に切られている	14	9
SK33	円	33.0	30.0	9.5				
SK34	円	30.0	26.0	8.5	弥生上器			
SK35	円	25.0	23.0	25.0	弥生土器			
SK36	円	(13.0)	24.0	5.4	弥生上器	SD1に切られている		
SK37	円	30.0	30.0	8.6				
SP38	円	30.0	28.0	6.6		SB4を構成する柱穴	9	6
SP39	楕円	35.0	25.0	12.3	弥生土器	SB3を構成する柱穴	8	5
SK40	円	30.0	24.0	18.4	弥生土器	SK41を切っている		
SK41	楕円	57.0	22.0	2.9		SK40に切られている		
SK42		(50.0)	94.0	22.0	弥生土器	SK10に切られている		
SP43	円	42.0	34.0	5.5		SB2を構成する柱穴、SK31に切られている	7	5
SK44	円	25.0	23.0	8.8		SK11に切られている		
SK45	楕円	28.0	21.0	9.6	弥生上器			
SK46	円	27.0	25.0	9.6	弥生土器			
SD47	—	229.0	43.0	15.7	弥生上器			
SK48	不整	60.0	40.0	8.8				
SK49	円	15.0	15.0	5.9				
SK50	—	(12.0)	23.0	7.5	弥生土器			
SK51	円	30.0	28.0	14.3	弥生上器			

（　）内は残存長、又は復元数値

表2－2　遺構一覧

遺構	平面形	規模（cm）			出土遺物	備考	挿図	写真図版
		長さ（長軸）	幅（短軸）	深さ				
SP52	楕円	48.0	36.0	11.7	弥生土器	SB3を構成する柱穴、SK53に切られている	8	5
SK53	円	27.0	27.0	15.4	弥生土器	SP52を切っている		
SK54	円	24.0	21.0	15.6	弥生土器			
SK55	円	38.0	37.0	15.1	弥生土器			
SK56	円	26.0	24.0	14.8				
SK57	円	20.0	17.0	10.5		SK58を切っている		
SK58	不整	71.0	38.0	10.7		SK57に切られている		
SK59	円	30.0	28.0	12.4				
SK60	円	28.0	23.0	15.1				
SK61	円	26.0	23.0	9.6				
SK62	楕円	40.0	26.0	24.9				
SP63	円	29.0	25.0	30.9	弥生土器	SB4を構成する柱穴	9	6
SK64	—	46.0	(20.0)	5.5		SD1、SK22に切られている		
SK65	楕円	65.0	23.0	28.0	弥生土器			
SP66	円	29.0	29.0	24.2		SB3を構成する柱穴	8	5
SP67	楕円	43.0	33.0	23.1				
SK68	楕円	20.0	14.0	11.3	柱根	SK69を切っている		
SK69	円	13.0	13.0	11.2		SK68に切られている		
SK70	円	25.0	24.0	10.3				
SK71	楕円	52.0	19.0	4.3				
SP72	楕円	39.0	28.0	16.0	弥生土器	SB4を構成する柱穴	9	6
SD73		92.0	18.0	3.2				
SK74	—	(123.0)	143.0	22.6	弥生土器		12	
SP75	円	26.0	23.0	11.4		SB3を構成する柱穴	8	5
SK76	円	44.0	42.0	28.0	弥生土器			
SK77	円	35.0	32.0	19.8	弥生土器	SK78を切っている		
SK78	円	44.0	40.0	11.1		SK77に切られている		
SK79	楕円	74.0	63.0	26.9	弥生土器			
SP80	円	34.0	34.0	20.1		SB4を構成する柱穴	9	6
SK81	円	23.0	23.0	11.4	弥生土器			
SK82	円	20.0	15.0	12.0				
SK83	円	30.0	35.0	17.6	弥生土器			
SK84	円	21.0	20.0	15.0				
SK85	円	24.0	20.0	12.6	弥生土器	SK86を切っている		
SK86	不整	108.0	59.0	25.2	弥生土器	SK85に切られている		
SK87	円	78.0	66.0	18.5	弥生土器			
SK88	円	22.0	21.0	13.0				
SK89	円	32.0	31.0	17.0	弥生土器			
SK90	円	44.0	39.0	21.3	弥生土器			
SK91	円	30.0	26.0	29.9	弥生土器	SK92を切っている		
SK92	楕円	44.0	35.0	22.9	弥生土器	SK91に切られている		
SK93	円	21.0	21.0	3.5	柱根		12	11·12
SK94	円	33.0	31.0	23.1	弥生土器			
SK95	円	26.0	23.0	10.5	弥生土器			
SK96	円	31.0	29.0	16.8	弥生土器	SD109を切っている		
SK97	不整	72.0	62.0	13.4	弥生土器			
SK98	円	31.0	29.0	18.8	弥生土器	SK99を切っている		
SK99	隅丸方	99.0	62.0	30.5	弥生土器	SK98に切られている		
SK100	円	26.0	26.0	6.1	弥生土器、柱根		12	11·12
SK101	隅丸方	112.0	65.0	38.4	弥生土器			
SK102	円	17.0	16.0	8.5				
SK103	円	21.0	21.0	11.0				

（　）内は残存長、又は復元数値

表２－３　遺構一覧

遺構	平面形	規模（cm）			出土遺物	備考	挿図	写真図版
		長さ（長軸）	幅（短軸）	深さ				
SK104	円	26.0	26.0	26.7				
SK105	—	60.0	40.0	19.6				
SK106	円	22.0	20.0	14.6		SD109を切っている		
SK107	隅丸方	80.0	41.0	4.9				
SP108	円	42.0	41.0	22.7		SB5を構成する柱穴、SK118を切っている	10	6
SD109	—	(625.0)	48.0	6.9	弥生土器	SK96・106に切られている、SK110を切っている		
SK110	—	117.0	(50.0)	32.7	弥生土器	SD109に切られている		
SK111	円	25.0	21.0	24.7				
SP112	不整	63.0	50.0	17.6		SB5を構成する柱穴	10	6
SK113	円	43.0	41.0	18.6	弥生土器			
SK114	不整	116.0	75.0	41.9	弥生土器			
SK115	円	38.0	37.0	19.0	弥生土器			
SK116	円	28.0	27.0	20.8	弥生土器			
SK117	円	27.0	24.0	9.0	弥生土器			
SK118	楕円	60.0	48.0	13.6	弥生土器			
SK119	円	19.0	18.0	11.0	弥生土器、柱根		12	
SK120	円	35.0	32.0	17.2	弥生土器			
SK121	円	17.0	16.0	10.8				
SK122	円	37.0	34.0	11.6	弥生土器			
SK123	楕円	32.0	24.0	11.0				
SK124	円	15.0	15.0	4.9				
SK125	円	15.0	11.0	4.6				
SK126	—	(91.0)	41.0	30.9	弥生土器	SK127を切っている		
SK127	—	(44.0)	44.0	24.2	弥生土器	SK126に切られている		
SK128	円	26.0	22.0	15.8				
SK129	円	25.0	20.0	8.8	弥生土器			
SK130	楕円	56.0	35.0	19.8	弥生土器			
SK131	円	21.0	20.0	9.5	弥生土器			
SP132	円	38.0	37.0	13.5	弥生土器	SB5を構成する柱穴	10	6
SP133	円	31.0	30.0	26.1	柱根	SB6を構成する柱穴	11・12	6・11・12
SK134	円	24.0	20.0	11.1	弥生土器	SP133に切られている		
SK135	—	43.0	(22.0)	12.7	弥生土器			
SK136	円	55.0	53.0	32.7	弥生土器			
SK137	円	35.0	35.0	16.2	弥生土器	SD138を切っている		
SD138		288.0	17.0	21.4	弥生土器	SK137に切られている		
SK139	不整	39.0	38.0	15.3	弥生土器			
SK140	円	19.0	15.0	11.7				
SK141		34.0	30.0	25.8	弥生土器			
SP142	隅丸方	51.0	31.0	19.1	弥生土器	SB5を構成する柱穴	10	6
SK143	円	28.0	27.0	24.2	弥生土器			
SK144	円	61.0	59.0	14.3	弥生土器			
SK145	—	(28.0)	61.0	27.0				
SK146	楕円	24.0	16.0	11.5				
SK147	円	19.0	15.0	6.8				
SP148	円	28.0	27.0	18.3	弥生土器	SB6を構成する柱穴	11	6
SK149	円	32.0	26.0	15.0	弥生土器			
SK150	円	28.0	24.0	13.7	弥生土器	SK153を切っている		
SD151	—	(462.0)	76.0	19.9	弥生土器	SD138、SP160に切られている	12	
SK152	円	28.0	28.0	21.9	弥生土器	SK153を切っている		

（　）内は残存長、又は復元数値

表2－4　遺構一覧

遺構	平面形	規模（cm）			出土遺物	備考	挿図	写真図版
		長さ（長軸）	幅（短軸）	深さ				
SK153	不整	156.0	87.0	26.9	弥生土器	SK150・152に切られている		
SK154	—	121.0	(35.0)	10.6	弥生土器	SK155を切っている	12	
SK155	—	155.0	(69.0)	33.3	弥生土器	SK156に切られている	12	
SK156	円	31.0	30.0	10.8				
SK157	—	(45.0)	66.0	11.0				
SD158	—	106.0	25.0	12.3				
SK159	楕円	25.0	13.0	64.0	柱根		12	
SP160	円	26.0	25.0	5.1	弥生土器	SB6を構成する柱穴	11	6
SK161		(30.0)	53.0	14.2	弥生土器			
SK162	不整	31.0	31.0	9.3		SK163を切っている		
SK163	楕円	23.0	17.0	5.0		SK162に切られている		
SK164	不整	75.0	48.0	5.7	弥生土器			
SK165	隅丸方	61.0	53.0	15.4	弥生土器			
SK166	円	19.0	19.0	12.2	弥生土器			
SK167	円	20.0	19.0	6.7	弥生土器			
SK168	不整	169.0	76.0	19.3	弥生土器		15	10
SK169	不整	52.0	49.0	16.0	弥生土器			
SK170	—	(39.0)	75.0	9.5	弥生土器			
SK171	—	(73.0)	74.0	28.2	弥生土器		12	
SK172	円	24.0	24.0	21.7	弥生土器	SK174を切っている		
SK173	—	(84.0)	72.0	17.8	弥生土器			
SK174	—	(229.0)	19.0	18.2	弥生土器	SK172に切られている、SK175を切っている		
SK175	不整	103.0	54.0	13.1	弥生土器	SK174に切られている		
SP176	楕円	29.0	21.0	15.2		SB6を構成する柱穴	11	6
SK177	円	22.0	20.0	5.3				
SK178	円	15.0	11.0	6.0				
SK179	円	12.0	12.0	14.1				
SK180	円	10.0	10.0	15.9				
SK181	円	15.0	13.0	6.3				
SK182	円	16.0	15.0	16.9				
SK183	楕円	21.0	15.0	8.4				
SK184	円	13.0	12.0	3.7				
SK185	円	11.0	10.0	4.1				
SK186	楕円	14.0	8.0	2.0				
SK187	楕円	20.0	11.0	4.7				
SK188	円	19.0	16.0					
SK189	円	14.0	11.0	4.5				
SK190	円	11.0	10.0	4.0				
SK191	円	11.0	10.0	20.8				
SK192	円	25.0	21.0	7.5				
SK193	円	39.0	36.0	11.2				
SK194	円	46.0	40.0	14.4				
SK195	—	(66.0)	108.0	7.6			12	

（　）内は残存長、又は復元数値

表3　掘立柱建物一覧

建物	梁行×桁行（間）	梁行長（m）	桁行長（m）	床面積（㎡）	主軸方位	挿図	写真図版
SB1	1×1	3.3～3.4	3.7～3.9	12.92	N－8°－W	6	5
SB2	1（以上）×2（以上）	2.0（以上）	3.7（以上）	7.4（以上）	N－72°－E	7	5
SB3	1×1	2.9～3.1	3.4～3.7	10.5	N－40°－E	8	5
SB4	1×1	3.7～4.4	4.3	17.2	N－15°－E	9	6
SB5	1×1	2.0～2.3	2.0～2.2	4.41	N－40°－E	10	6
SB6	1×1	2.5～2.6	3.3～3.4	8.25	N－19°－E	11	6

表4　掘立柱建物柱穴一覧

建物	遺構	平面形	規模（cm）			出土遺物	備考	挿図	写真図版
			長さ（長幅）	幅（短幅）	深さ				
SB1	SP2	円	41.0	36.0	5.5	弥生土器		6	5
	SP6	楕円	58.0	32.0	20.8	弥生土器		6	5
	SP17	円	33.0	30.0	12.6			6	5
	SP26	円	30.0	30.0	19.4	弥生土器		6	5
SB2	SP7	円	30.0	28.0	28.0	弥生土器		7	5
	SP12	円	22.0	21.0	20.3	弥生土器		7	5
	SP19	円	21.0	19.0	7.2			7	5
	SP20	円	22.0	21.0	10.0			7	5
	SP43	円	42.0	34.0	5.5		SK31に切られている	7	5
SB3	SP39	楕円	35.0	25.0	12.3	弥生土器		8	5
	SP52	楕円	48.0	36.0	11.7	弥生土器	SK53に切られている	8	5
	SP66	円	29.0	29.0	24.2			8	5
	SP75	円	26.0	23.0	11.4			8	5
SB4	SP38	円	30.0	28.0	6.6			9	6
	SP63	円	29.0	25.0	30.9	弥生土器		9	6
	SP72	楕円	39.0	28.0	16.0	弥生土器		9	6
	SP80	円	34.0	34.0	20.1			9	6
SB5	SP108	円	42.0	41.0	22.7		SK118を切っている	10	6
	SP112	不整	63.0	50.0	17.6			10	6
	SP132	円	38.0	37.0	13.5	弥生土器		10	6
	SP142	隅丸方	51.0	31.0	19.1	弥生土器		10	6
SB6	SP133	円	31.0	30.0	26.1	柱根		11・12	6・11・12
	SP148	円	28.0	27.0	18.3	弥生土器		11	6
	SP160	円	26.0	25.0	5.1	弥生土器		11	6
	SP176	楕円	29.0	21.0	15.2			11	6

3　出土遺物

出土遺物は、溝、土坑、ピットなどから出土し、そのほとんどが弥生時代中期中葉から後葉に属する。特にSD１、SK32からは纏まった量の弥生土器が出土した。弥生土器以外の出土遺物はわずかであるが、石器、中世土師器、黒色土器などが出土している。以下、出土遺物の概要について記述を行うが、個体の詳細についてはそれぞれの観察表に譲る。

１．弥生土器

今回の調査では各遺構で弥生土器が出土しているが、特にSD１、SK32で纏まった量の弥生土器が出土した。出土した弥生土器は概ね第Ⅲ様式から第Ⅳ様式までで、出土遺物全体での比率は第Ⅳ様式が高いが、SK32では第Ⅲ様式の比率が高かった。また、少量ではあるが、第Ⅱ様式の可能性のある遺物（49、85）も確認することができた。

出土した弥生土器の器種であるが、第Ⅲ様式を構成する器種は、壷、広口壺、太頸広口壺、有段口縁壺、細頸壺、短頸壺、甕、鉢を確認した。第Ⅳ様式を構成する器種は、壷、広口壺、太頸広口壺、有段口縁壺、細頸壺、甕、鉢、台付鉢、台付壺、高杯、蓋を確認した。第Ⅲ様式、第Ⅳ様式ともにある程度豊富な器種が揃っているといえるであろう。

SD１（図16～19）

今回の調査で、最も弥生土器の出土量の多かった遺構である。第Ⅲ様式（１～４）から第Ⅳ様式（５～48）まで出土しているが、その大半が第Ⅳ様式であった。出土した器種は、壷（７・13・45・46）、広口壺（１・５・11）、太頸広口壺（12）、有段口縁壺（６・８・９）、細頸壺（10）、甕（２～４・14～34・47・48）、鉢（35）、台付鉢（36・39・40）、台付壺（37・38）、高杯（41～43）、蓋（44）である。器種、量ともに豊富な第Ⅳ様式に対して、第Ⅲ様式は器種、量ともに乏しい出土であった。このような出土傾向は、過去の調査での出土傾向とも合致するものである。

SK23（図19）

出土量は多くないが、第Ⅱ様式の可能性のある遺物（49）を含み、第Ⅲ様式（50・51）から第Ⅳ様式（52）まで出土している。遺物量が少ないので参考程度となるが、図示したものでは第Ⅱ～Ⅲ様式の比率が高い。出土した器種は広口壺（49）、甕（50～52）である。

SK32（図20・21）

第Ⅲ様式（53～64・70～73・75・76）から第Ⅳ様式（65～69・74）まで出土しているが、その大半が第Ⅲ様式であった。この出土傾向は過去の調査での出土傾向と異なる。本遺跡における弥生集落の継続期間を検討するにあたり重要な遺構と言えるであろう。出土した器種は壷（70～72・75）、広口壺（53）、太頸広口壺（54）、有段口縁壺（55～57・65）、細頸壺（58・67）、短頸壺（59）、甕（60～64・66・73・74・76）、高杯（68）、鉢（69）、である。69の鉢は、搬入品（紀伊地方？）の可能性がある。長浜市の今川東遺跡で類例が見られる。

SK97（図21）

出土量は多くないが、第Ⅲ様式（77・78）から第Ⅳ様式まで出土している。遺物量が少ないので参考程度となるが、図示したものでは第Ⅲ様式の比率が高い。出土した器種は壷(80)、甕（77～79）である。

SK154（図21）

出土量は多くないが、第Ⅳ様式（81～84）主体で出土している。出土した器種は甕（81～83）、高杯（84）である。

SK168（図21）

出土量は多くないが、第Ⅱ様式の可能性のある遺物（85）を含み、第Ⅳ様式（86～88）主体で出土している。出土した器種は広口壺（86）、太頸広口壺（87）、甕（85）、高杯（88）である。

SK173（図21・22）

第Ⅲ様式から第Ⅳ様式（89～95）まで出土している。出土遺物は第Ⅲ様式の比率が高い。出土した器種は壺（95・101）、有段口縁壺（89）、甕（90～94）である。

SK74（図22）

第Ⅲ様式から第Ⅳ様式と考えられる、壺の底部（96・97）が出土している。

SK155（図22）

出土量は多くないが、第Ⅲ様式（98・100）から第Ⅳ様式（99）まで出土している。遺物量が少ないので参考程度となるが、図示したものでは第Ⅲ様式の比率が高い。出土した器種は壺（100）、甕（98）、鉢（99）である。

SK175（図22）

出土量は多くないが、第Ⅳ様式（102・103）主体で出土している。出土した器種は広口壺（103）、鉢（102）である。

2．石器（図23）

今回の調査ではわずかな量ではあるが石器も出土した。出土した石器は磨製石斧（116）1点、砥石（117～119）3点、石鏃（120）1点、磨製石剣（121）1点である。

3．弥生時代以外の土器（図23）

今回の調査で出土した土器は、その大半が弥生土器であった。それ以外の土器はごくわずかであったが、縄文土器（115）1点、中世土師器（122～124）3点、黒色土器（125～127）3点が出土している。縄文土器は注口土器で注口と胴部の付け根部分のものと思われる。中世土師器、黒色土器は、SK22からの出土である。今回の調査で、確実に弥生時代以降と断定できる唯一の遺構である。

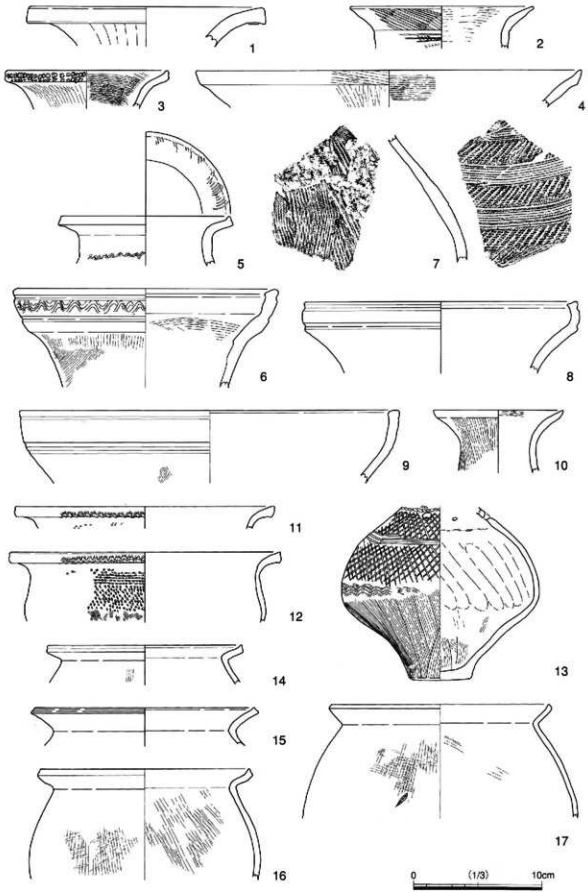


図16　SD１出土遺物実測図

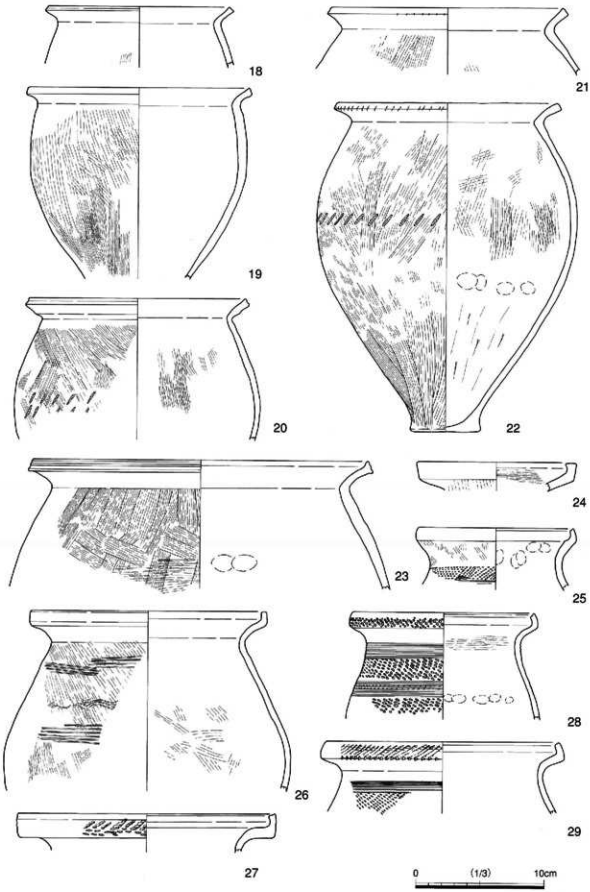


図17　SD１出土遺物実測図

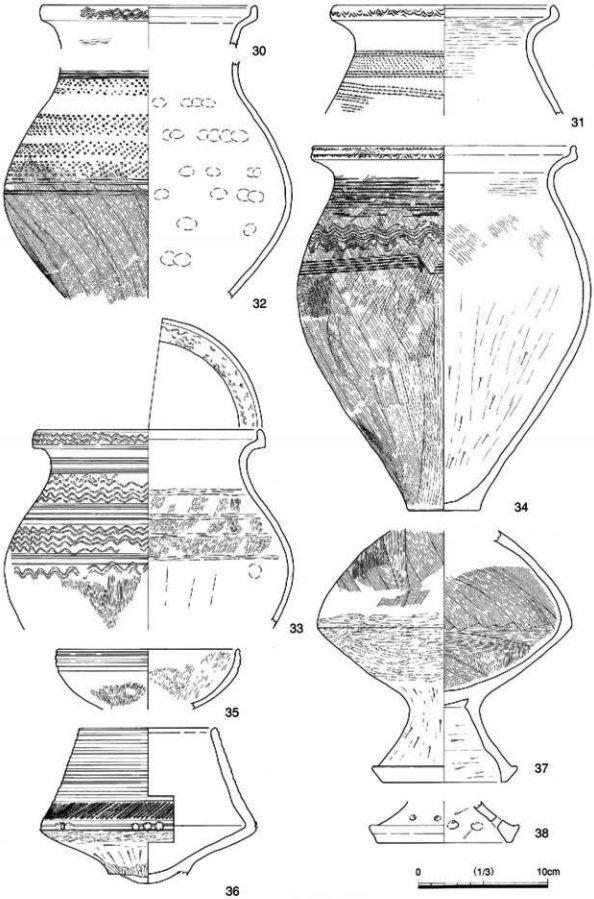


図18　SD１出土遺物実測図

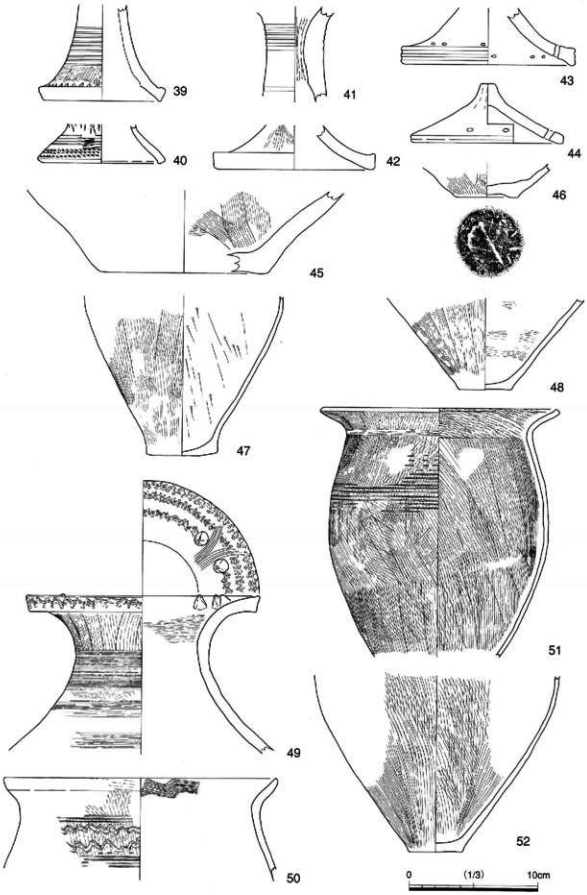


図19　SD１・SK23出土遺物実測図

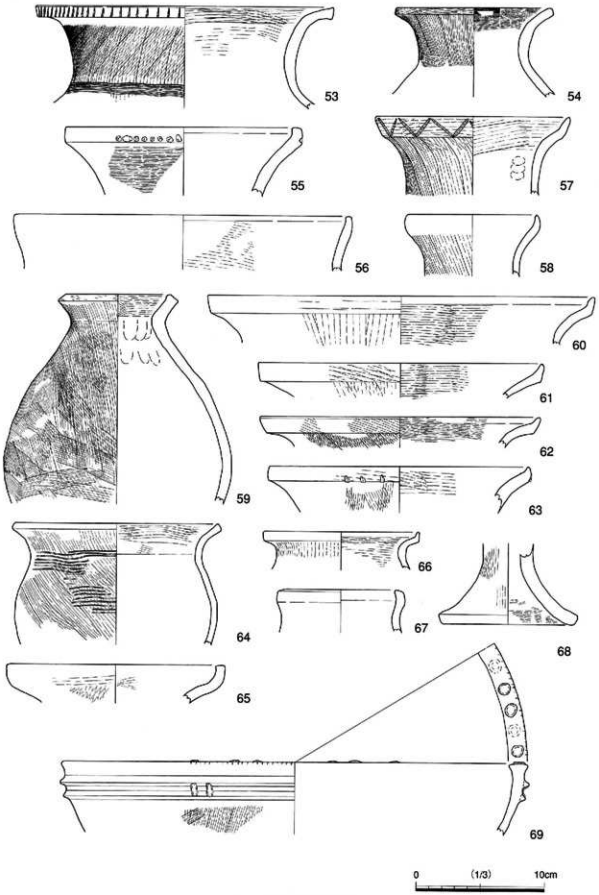


図20　SK32出土遺物実測図

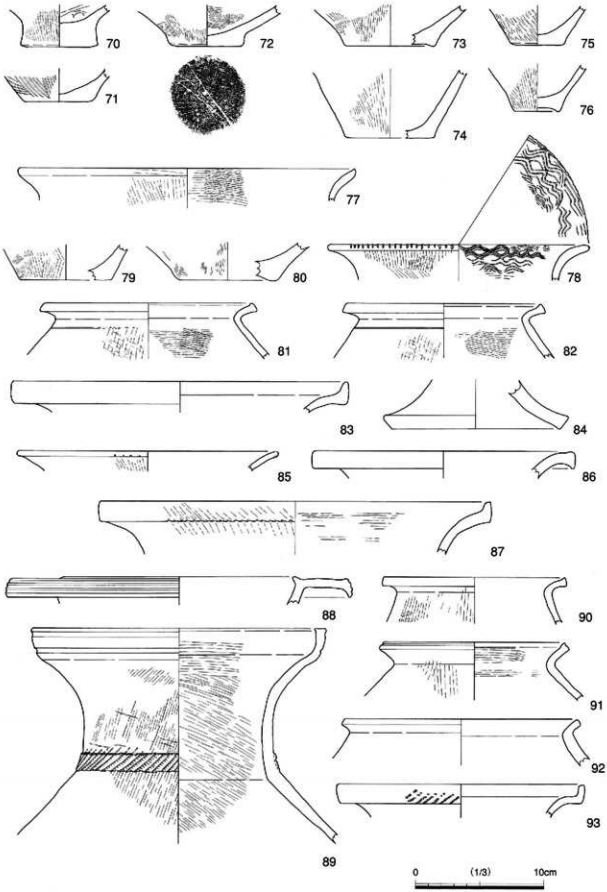


図21　SK32・97・154・168・173出土遺物実測図

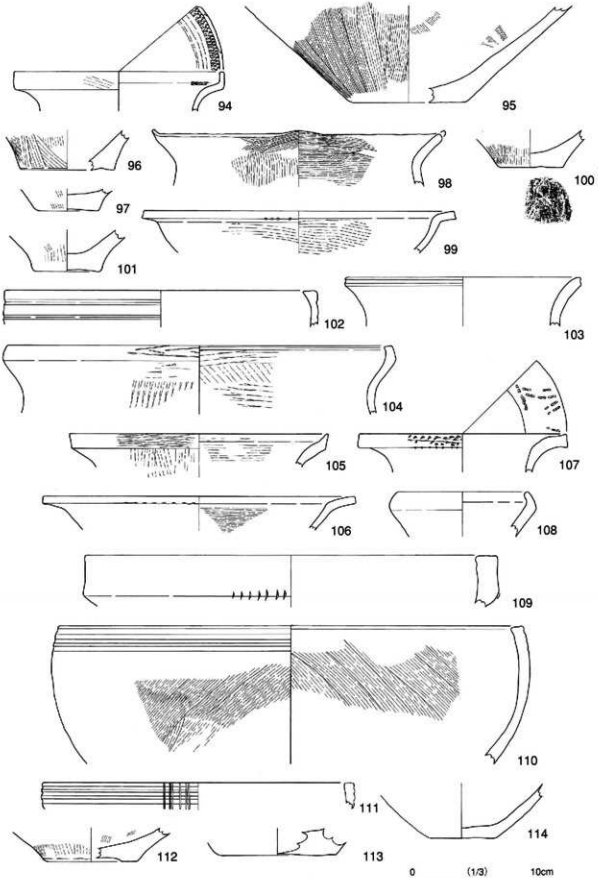


図22　各遺構出土遺物実測図

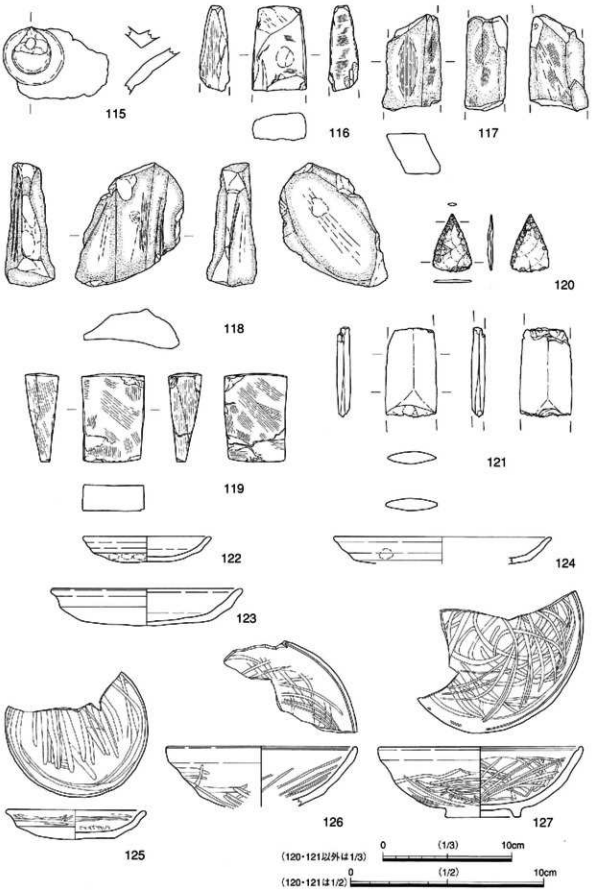


図23　各遺構出土遺物実測図

表5－1　遺物観察表

No.	種類	器種	系統	遺構名	法量（cm）	調整・文様	備考	時期
1	弥生上器	広口壺		SD1	口　径　18.0 残存高　3.1	（形態）やや外反しながら開く口縁を持つ。 （外面）口縁端部はヨコナデ。その下方は縦位ミガキ。 （内面）ヨコナデ。		第Ⅲ様式
2	弥生上器	甕	近江系	SD1	口　径　14.0 残存高　3.3	（形態）くの字状口縁。 （外面）口縁部は左上がりハケ。頸部から胴部上半は左上がりハケ後、ハケ工具による直線文。 （内面）横位ハケ。		第Ⅲ様式
3	弥生上器	甕	近江系	SD1	口　径　12.8 残存高　3.0	（形態）口縁部外面はやや段をつける口縁を持つ。 （外面）口縁部に刺突文。頸部は左上がりの縦位ハケ。 （内面）横位ハケ。		第Ⅲ様式
4	弥生上器	甕	近江系	SD1	口　径　30.0 残存高　2.9	（形態）口縁部外面はやや段をつける口縁を持つ。 （外面）口縁部はやや左上がりの横位ハケ。頸部は縦位ハケ。 （内面）横位ハケ。		第Ⅲ様式
5	弥生上器	広口壺		SD1	口　径　13.0 残存高　3.9	（形態）外反する頸部から口縁部をもち、口縁端部をやや上方に摘み上げている。 （外面）口縁部はヨコナデ。頸部に櫛描波状文（残存部では4本確認）。 （内面）口縁部に櫛描刺形文（6本/1.2cm）。		第Ⅳ様式
6	弥生上器	有段口縁壺		SD1	口　径　20.6 残存高　7.7	（形態）外反気味の頸部に、上方に立ち上がる口縁部を持つ。 （外面）口縁部はヨコナデ後、櫛描波状文（5本/0.9cm）。その後上下端に各1条の凹線文。頸部は縦位と右上がりハケ。 （内面）口縁部はヨコナデ。その下方から頸部にかけて横位ハケ。		第Ⅳ様式
7	弥生土器	壺		SD1	残存高　10.0	（形態）壺の胴部上半。 （外面）胴部上半の破片資料ではあるが、残存部で櫛描直線文（8本/1.7cm）3帯、櫛描刺点文3帯を交互に施文。 （内面）左上がりハケ。		第Ⅳ様式
8	弥生土器	有段口縁壺		SD1	口　径　21.0 残存高　5.6	（形態）外反気味の頸部に、上方に立ち上がる口縁部を持つ。 （外面）口縁部はヨコナデ後、上下端にそれぞれ1条の凹線文。頸部は縦位ハケ。 （内面）口縁部はヨコナデ。		第Ⅳ様式
9	弥生上器	有段口縁壺		SD1	口　径　29.0 残存高　5.7	（形態）外反気味の頸部に、上方に立ち上がる口縁部を持つ。 （外面）口縁部はヨコナデ後、上端に1条、下端に2条の凹線文。頸部は左上がりハケ （内面）口縁部はヨコナデ。		第Ⅳ様式
10	弥生上器	細頸壺		SD1	口　径　10.0 残存高　4.9	（形態）頸部から外反しながら立ち上がる口縁部を持つ。口縁部外面はやや段をつける。 （外面）口縁外面はヨコナデ。その下方から頸部にかけて縦位ハケ。 （内面）口縁部は横位ハケ。		第Ⅳ様式
11	弥生上器	広口壺	近江系？	SD1	口　径　20.0 残存高　1.7	（形態）頸部から外反しながら開く口縁部を持つ。 （外面）口縁部はヨコナデ後、端部下端に刺突文。 （内面）ヨコナデ。		第Ⅳ様式
12	弥生上器	大頸広口壺	近江系	SD1	口　径　21.0 残存高　5.5	（形態）頸部より外反しながら開く口縁部を持ち、口縁端部はやや肥厚する。 （外面）口縁部はヨコナデ後、下端に刺突文。頸部から胴部上半は刺突列点文、その下方は櫛描波状文（残存部では4本確認） （内面）口縁端部はヨコナデ。頸部はナデ。		第Ⅳ様式

表5－2　遺物観察表

No.	種類	器種	系統	遺構名	法量（cm）	調整・文様	備考	時期
13	弥生土器	壺	近江系	SD1	底　径　4.5 胴　径　15.1 残存高　13.5	（形態）大きく張る胴部を持つ。 （外面）胴部上半から胴部最曲部にかけて、上部より刺突文、斜格子文を施文し、斜格子文の中央で、ヨコナデ後直線文を施す。胴部上半に穿孔が1箇所確認できる。胴部最曲部に櫛描波状文。胴部下半は縦位ハケ。 （内面）胴部上半はナデ。胴部下半は縦位ハケ後、ナデ。		第Ⅳ様式
14	弥生土器	壺		SD1	口　径　15.0 残存高　3.1	（形態）くの字状口縁。 （外面）口縁端部に1条の凹線文。口縁部はヨコナデ。胴部上半は縦位ハケ。 （内面）口縁部はヨコナデ。胴部上半はナデ。		第Ⅳ様式
15	弥生土器	壺		SD1	口　径　17.1 残存高　3.0	（形態）くの字状口縁。 （外面）口縁端部に1条の凹線文。口縁部はヨコナデ。 （内面）口縁部はヨコナデ。胴部上半はナデ。		第Ⅳ様式
16	弥生土器	壺		SD1	口　径　16.8 胴　径　18.0 残存高　8.7	（形態）くの字状口縁。 （外面）口縁部はヨコナデ。胴部上半はタタキ後、縦位ハケ。 （内面）口縁部から頸部はヨコナデ。胴部上半は左上がりハケ。		第Ⅳ様式
17	弥生土器	壺		SD1	口　径　17.4 残存高　8.8	（形態）くの字状口縁。 （外面）口縁部はヨコナデ。胴部上半はタタキ後、横位ハケ・縦位ハケの順にハケ。最後に櫛描列点文。 （内面）口縁部はヨコナデ。		第Ⅳ様式
18	弥生土器	壺		SD1	口　径　14.0 残存高　4.8	（形態）くの字状口縁。 （外面）口縁端部に1条の凹線文。口縁部はヨコナデ。胴部上半は縦位ハケ。 （内面）口縁部はヨコナデ。胴部上半はナデ。		第Ⅳ様式
19	弥生土器	壺		SD1	口　径　17.6 胴　径　16.8 残存高　15.0	（形態）頸部で「く」字状に屈曲し、短く立ち上がる口縁部を持つ。 （外面）口縁部から頸部はヨコナデ。胴部はタタキ後、縦位ハケ。 （内面）口縁部はヨコナデ。胴部はハケ後、ド半のみヘラケズリ。		第Ⅳ様式
20	弥生土器	壺		SD1	口　径　17.4 胴　径　19.2 残存高　11.1	（形態）くの字状口縁。 （外面）口縁部から頸部はヨコナデ。胴部はタタキ後、左上がりハケで最後に胴部中央に櫛描列点文。 （内面）口縁部はヨコナデ。胴部はハケ後、ド半のみヘラケズリ。		第Ⅳ様式
21	弥生土器	壺		SD1	口　径　18.0 残存高　5.2	（形態）くの字状口縁。 （外面）口縁端部にキザミ。口縁部はヨコナデ。胴部上半は右上がりハケ。 （内面）口縁部はヨコナデ。胴部上半は縦位ハケ。		第Ⅳ様式
22	弥生土器	壺		SD1	口　径　17.0 胴　径　20.1 底　径　5.4	（形態）くの字状口縁。 （外面）口縁部はヨコナデ後、端部にキザミ。胴部上半は右上がりハケ後、櫛描列点文。胴部下半は縦位ハケ。 （内面）口縁部はヨコナデ。胴部上半はハケ後、一部ナデ。胴部下半はハケ後、上方向のヘラケズリ。		第Ⅳ様式
23	弥生土器	壺		SD1	口　径　26.0 残存高　10.0	（形態）くの字状口縁。口縁端部に面を取る。 （外面）口縁端部に2条の凹線文。口縁部はヨコナデ。胴部上半はタタキ後、縦位ハケ。 （内面）口縁部はヨコナデ。胴部上半はナデ。		第Ⅳ様式
24	弥生土器	壺	近江系	SD1	口　径　12.1 残存高　2.2	（形態）外反する頸部に、上方に立ち上がる口縁部を持つ。受口状口縁。 （外面）口縁部外面はヨコナデ。その下方は縦位ハケ。 （内面）口縁端部はヨコナデ。その下方は横位ハケ。		第Ⅳ様式

表5－3　遺物観察表

No.	種類	器種	系統	遺構名	法量（cm）	調整・文様	備考	時期
25	弥生土器	甕	近江系	SD1	口　径　12.1 残存高　4.8	（形態）外反する頸部に、上方に立ち上がる口縁部を持つ。受口状口縁。 （外面）口縁部外面はヨコナデ。その下方は左上がりハケ。頸部から胴部上半にかけて櫛描列点文、その下方に櫛描直線文。 （内面）口縁部は強いヨコナデ。その下方はナデで、指頭圧痕が明瞭である。		第Ⅳ様式
26	弥生土器	甕	近江系	SD1	口　径　18.6 胴　径　22.5 残存高　14.1	（形態）外反する頸部に、上方に立ち上がる口縁部を持つ。受口状口縁。 （外面）口縁部はヨコナデ。胴部は左上がりハケ後、上部より櫛描直線文（4本/0.9cm）、櫛描波状文（4本/0.9cm）、櫛描直線文（5本/1.2cm）を施文。 （内面）口縁部から頸部はヨコナデ。胴部はハケ後、一部ナデ。		第Ⅳ様式
27	弥生土器	甕	近江系	SD1	口　径　20.0 残存高　3.0	（形態）外反する頸部に、上方に立ち上がる口縁部を持つ。受口状口縁。 （外面）口縁部は櫛描列点文後、上半ヨコナデ。 （内面）ヨコナデ。		第Ⅳ様式
28	弥生土器	甕	近江系	SD1	口　径　14.0 残存高　8.3	（形態）外反する頸部に、上方に立ち上がる口縁部を持つ。受口状口縁。端部に面を持ち、内傾する。 （外面）口縁部に櫛描列点文。頸部から胴部上半にかけて櫛描直線文（6本/1.2cm）2帯、櫛描列点文2帯を交互に施文。下方の櫛描直線文は、縦位の直線文後に施文されている。 （内面）口縁部はヨコナデ。頸部は横位ハケ。胴部上半はナデ。		第Ⅳ様式
29	弥生土器	甕	近江系	SD1	口　径　18.0 残存高　5.6	（形態）外反する頸部に、上方に立ち上がる口縁部を持つ。受口状口縁。 （外面）口縁部外面に櫛描列点文。口縁部下端に鋸突文。頸部から胴部上半にかけて櫛描直線文（7本/1.0cm）、その下方に櫛描列点文。 （内面）ヨコナデ。		第Ⅳ様式
30	弥生土器	甕	近江系	SD1	口　径　17.0 残存高　3.4	（形態）外反する頸部に、上方に立ち上がる口縁部を持つ。受口状口縁。 （外面）口縁部に櫛描波状文（4本/1.0cm）1帯。頸部に櫛描直線文（残存部では2本確認）。 （内面）ヨコナデ。		第Ⅳ様式
31	弥生土器	甕	近江系	SD1	口　径　17.0 残存高　8.6	（形態）外反する頸部に、上方に立ち上がる口縁部を持つ。受口状口縁。 （外面）口縁部に櫛描波状文1帯後、上部だけヨコナデ。頸部から胴部上半にかけて櫛描列点文2帯。 （内面）口縁部はヨコナデ。頸部は横位ハケ。胴部上半はナデ。		第Ⅳ様式
32	弥生土器	甕	近江系	SD1	胴　径　22.3 残存高　17.9	（形態）おそらく受口状口縁甕の胴部。 （外面）頸部から胴部上半にかけては縦位ハケ後、上部より櫛描直線文（残存部で4本）1帯、櫛描列点文4帯、最後に櫛描直線文（4本/1.5cm）を施文。胴部下半は左上がり。 （内面）ナデ。指頭圧痕が明瞭である。		第Ⅳ様式
33	弥生土器	甕	近江系	SD1	口　径　17.2 胴　径　22.4 残存高　15.6	（形態）外反する頸部に、上方に立ち上がる口縁部を持つ。受口状口縁。 （外面）口縁部に櫛描波状文1帯。頸部から胴部上半にかけて櫛描直線文（3本/1.9cm）3帯、櫛描波状文3帯を交互に施文。胴部下半は縦位ハケ後、一部ナデ。 （内面）口縁部に櫛描波状文1帯。胴部上半は右上がりハケ後、等間隔でヨコナデ。胴部下半は縦位ケズリ。		第Ⅳ様式

表５－４　遺物観察表

No.	種類	器種	系統	遺構名	法量（cm）	調整・文様	備考	時期
34	弥生土器	甕	近江系	SD1	口　径　20.0 胴　径　20.2 底　径　5.4 器　高　28.5	（形態）外反する胴部に、上方に立ち上がる口縁部を持つ。受口状口縁。 （外面）口縁部に櫛描波状文後、1条の凹線文。頸部から胴部上半にかけては左上がりハケ後、上部より複帯の櫛描直線文、櫛描波状文（9本/1.9cm）、櫛描直線文（7本/1.3cm）を施文。胴部下半はやや左上がりの縦位ハケ。 （内面）口縁部はヨコナデ。頸部は横位ハケ。胴部上半は左上がりハケ後、ナデ。胴部下半は上方向のヘラケズリ後、ナデ。		第Ⅳ様式
35	弥生土器	鉢（台付）		SD1	口　径　14.0 残存高　4.7	（形態）胴部から口縁部にかけて緩やかに内湾しながら立ち上がる。 （外面）口縁部はヨコナデ後、3条の凹線文。胴部は右上がりハケ。胴部下半は縦位ヘラミガキ。 （内面）口縁端部はヨコナデ。その後、胴部にかけて縦位ヘラミガキ。		第Ⅳ様式
36	弥生土器	台付鉢		SD1	口　径　10.5 胴　径　16.7 残存高　12.0	（形態）鉢は胴部下半で屈曲し、緩やかに内傾しながら立ち上がる口縁部を持つ。 （外面）口縁部から胴部にかけて、上部から9条の凹線文、櫛描列点文、2条の凹線文が巡る。一帯下の凹線文上には3個1セットの円形浮文を6箇所施文。胴部下半屈曲部より下では、全体に上方向のケズリ後、屈曲部近くの上半のみに左方向ケズリ、その後横位ヘラミガキ。 （内面）口縁部から胴部屈曲にかけてはヨコナデ。屈曲部から下半はナデ。		第Ⅳ様式
37	弥生土器	台付壺（鉢）		SD1	胴　径　19.6 底　径　9.4 残存高　19.7	（形態）台付壺（鉢）。脚柱端部を外方へつまみ出す。 （外面）胴部上半は左上がりハケ。胴部下半は上方向のヘラケズリ後、縦位ヘラミガキ。脚部は上方向のヘラケズリ。 （内面）胴部上半は左上がりハケ。胴部下半は左回りの放射状縦位ハケ。脚部は左方向のヘラケズリ。		第Ⅳ様式
38	弥生土器	台付壺（鉢、高杯）		SD1	底　径　10.4 残存高　3.2	（形態）台付壺（鉢、高杯）の脚部。脚裾部付近に穿孔。 （外面）ヨコナデ。 （内面）左下がりの方向のヘラケズリ。		第Ⅳ様式
39	弥生土器	台付鉢（？）		SD1	底　径　9.0 残存高　7.5	（形態）台付鉢（？）の脚部。緩やかに開き、端部外面を引き出す。 （外面）脚部は上部より直線文（9本）、その下方はヘラミガキで端部との屈曲部に刺突文。脚裾端部はヨコナデ。 （内面）脚裾部はヨコナデ。その上方は表面剥離の為、調整は不明瞭。		第Ⅳ様式
40	弥生土器	台付鉢（壺）	近江系	SD1	底　径　9.0 残存高　3.0	（形態）台付鉢（？）の脚部。緩やかに開く脚部。 （外面）脚残存部の上方から脚部にむかって、縦位ハケ、櫛描直線文（4本/1.0cm）、櫛描列点文。櫛描列点文施文後、櫛描直線文を施文していることが、切りあいより確認できる。 （内面）ヨコナデ。		第Ⅳ様式
41	弥生土器	高杯		SD1	脚部径　4.5 残存高　7.4	（形態）高杯の脚部。 （外面）脚上半に6条の凹線文、その下方に1条の凹線文（破片の為全数不明）。 （内面）未調整。		第Ⅳ様式
42	弥生土器	高杯		SD1	底　径　12.0 残存高　3.4	（形態）下方へ強く開く高杯の脚部。 （外面）脚裾部はヨコナデ。その上方は縦位ハケ。 （内面）小片の為不明瞭。		第Ⅳ様式

表5－5　遺物観察表

No.	種類	器種	系統	遺構名	法量（cm）	調整・文様	備考	時期
43	弥生土器	高杯		SD1	底　径　13.0 残存高　4.4	（形態）下方へ強く開く高杯の脚部。脚裾に穿孔。 （外面）ナデ （内面）ナデ		第Ⅳ様式
44	弥生土器	壺		SD1	口　径　11.5 器　高　4.5 つまみ径　1.0	等状の身の頂部に突出するつまみを付す。2箇所1セットの穿孔が対であるので、合計4箇所の穿孔。 （外面）つまみ部は板ナデ。その他はナデ。 （内面）摩滅しているがナデ。	壺の蓋？	第Ⅲ～Ⅳ様式
45	弥生土器	壺		SD1	底　径　13.0 残存高　6.3	（形態）壺の底部。底部から斜め方向にまっすぐ立ち上がる。 （外面）摩滅の為調整は不明瞭。 （内面）左上がりハケ。		第Ⅲ～Ⅳ様式
46	弥生土器	壺		SD1	底　径　5.0 残存高　2.7	（形態）壺の底部。 （外面）縦位ハケ。 （内面）ナデ。	底部に木葉の痕。	第Ⅲ～Ⅳ様式
47	弥生土器	甕		SD1	底　径　5.6 残存高　12.5	（形態）薄い底部から緩やかに外反しながら立ち上がる。 （外面）胴部下半は縦位ハケ。底部裏はハケ。 （内面）胴部下半は上方向のヘラケズリ。		第Ⅳ様式
48	弥生土器	甕		SD1	底　径　4.0 残存高　7.1	（形態）甕の底部。薄い底部から斜め上方にまっすぐ立ち上がる。 （外面）胴部下半はヘラケズリ（下方向？）後、縦位ハケ。 （内面）胴部下半は横位ハケ後、一部ナデ。		第Ⅳ様式
49	弥生土器	広口壺		SK23	口　径　18.0 残存高　12.3	（形態）やや細めの頸部に大きく外反する口縁部が続く。口縁内面にコブ状浮文。 （外面）口縁部に櫛描波状文（4本/0.7cm）。頸部は縦位ハケ。その下方から胴部にかけては一部左上がりハケ後、全体に複帯の櫛描直線文。 （内面）口縁部に2個1セットのコブ状浮文と、櫛描波状文（4本/0.5cm）3帯が廻る。頸部は複帯の櫛描直線文。胴部は、摩滅の為調整は不明瞭。		第Ⅱ～Ⅲ様式
50	弥生土器	甕	近江系	SK23	口　径　21.0 残存高　8.0	（形態）口縁部外面はやや段をつける口縁を持つ。 （外面）口縁部は横位ハケ。頸部から胴部上半は縦位ハケ。その後、頸部から胴部上半にかけて上部より櫛描直線文（3本/0.6cm）、櫛描波状文（2本/0.7cm）2帯、櫛描直線文（4本/0.8cm）を施文。 （内面）口縁部に櫛描波状文（9本/2.1cm）。		第Ⅲ様式
51	弥生土器	壺	近江系	SK23	口　径　18.0 胴　径　16.9 残存高　19.4	（形態）くの字状口縁。端部に面を持つ。 （外面）口縁部から胴部にかけてハケ後、頸部にヨコナデ、胴部に櫛描直線文。 （内面）口縁部から胴部にかけて左上がりハケ。		第Ⅲ様式
52	弥生土器	甕		SK23	底　径　4.0 残存高　13.8	（形態）薄い底部から斜め上方に緩やかに立ち上がる。 （外面）胴部は上方向のヘラケズリ後、左上がりハケ。 （内面）胴部は縦位ハケ。		第Ⅳ様式
53	弥生土器	広口壺		SK32	口　径　23.0 残存高　7.9	（形態）頸部から外反しながら開く口縁部を持つ。 （外面）口縁部はヨコナデ後、キザミ。その下方から頸部にかけては右上がりハケ。その後、頸部には櫛描直線文。 （内面）口縁部は横位ハケ。その下方は、摩滅の為調整は不明瞭。		第Ⅲ様式
54	弥生土器	大型広口壺		SK32	口　径　12.0 残存高　6.9	（形態）強く外反する口縁で、端部は面を持つ。 （外面）頸部は、横位・斜上がりハケ。端部下方から頸部にかけては縦位ハケ。頸部から下方は板ナデ。 （内面）口縁部は横位ハケ。頸部から下方はナデ。		第Ⅲ様式

表５－６　遺物観察表

No	種類	器種	系統	遺構名	法量（cm）	調整・文様	備考	時期
55	弥生土器	有段口縁壺		SK32	口　径　17.4 残存高　5.3	（形態）口縁部が上方へ立ち上がる有段口縁壺の口縁。 （外面）口縁部はヨコナデ後、刺突文。頸部は複帯構成の櫛描直線文。 （内面）口縁部はヨコナデ。		第Ⅱ様式
56	弥生土器	有段口縁壺		SK32	口　径　25.7 残存高　4.2	（形態）口縁部が上方へ立ち上がる有段口縁壺の口縁。 （外面）摩滅の為調整は不明瞭。 （内面）横位ハケ。		第Ⅱ様式？
57	弥生土器	有段口縁壺	近江系	SK32	口　径　15.0 残存高　6.1	（形態）外反気味の頸部に、上方に立ち上がる口縁部を持つ。 （外面）口縁部は横位ハケ後、山形文。頸部は左上がりハケ。 （内面）口縁部は横位ハケ。頸部以下は摩滅の為調整は不明瞭。		第Ⅱ様式
58	弥生土器	細頸壺		SK32	口　径　10.0 残存高　4.8	（形態）外半気味に上方に伸びる頸部から、内湾気味に立ち上がる口縁を持つ。 （外面）摩滅が激しいが、縦位ハケ。 （内面）摩滅の為調整は不明瞭。		第Ⅱ様式
59	弥生土器	短頸壺		SK32	口　径　8.1 胴　径　17.7 残存高　16.3	（形態）すぼまった頸部から、緩やかに外反しながら短く立ち上がる口縁部を持つ。 （外面）口縁端部はやや左上がりの横位ハケ。口縁部から胴部にかけては左上がりハケ。 （内面）口縁部は横位ハケ。頸部以下ナデ。		第Ⅱ様式
60	弥生土器	甕	近江系	SK32	口　径　30.0 残存高　3.7	（形態）口縁部外面はやや段をつける口縁を持つ。 （外面）口縁部は横位ハケ。頸部は縦位ハケ。 （内面）横位ハケ。		第Ⅱ様式
61	弥生土器	甕	近江系	SK32	口　径　22.0 残存高　2.7	（形態）口縁部外面はやや段をつける口縁を持つ。 （外面）口縁部は左上がりの横位ハケ。頸部は左上がりの縦位ハケ。 （内面）横位ハケ。		第Ⅱ様式
62	弥生土器	甕	近江系	SK32	口　径　21.6 残存高　2.4	（形態）口縁部外面はやや段をつける口縁を持つ。 （外面）口縁部は左上がりの横位ハケ。頸部は左上がりの縦位ハケ。 （内面）横位ハケ。		第Ⅱ様式
63	弥生土器	甕	近江系	SK32	口　径　20.0 残存高　3.6	（形態）口縁部外面はやや段をつける口縁を持つ。 （外面）口縁部は横位ハケ後、刺突文。頸部は縦位ハケ。 （内面）横位ハケ。		第Ⅱ様式
64	弥生土器	甕	近江系	SK32	口　径　16.4 胴　径　15.8 残存高　9.5	（形態）頸部より緩やかに外反する口縁部を持つ。 （外面）口縁端部はナデ。口縁部から頸部、胴部上半にかけて左上がりのハケ。その後頸部から胴部下半にハケ工具による直線文。 （内面）口縁部から頸部はヨコナデ。胴部上半はナデ。		第Ⅱ様式
65	弥生土器	有段口縁壺		SK32	口　径　16.4 残存高　3.0	（形態）口縁部が上方へ立ち上がる有段口縁壺の口縁。 （外面）頸部から縦位ハケ後、その上は横位ハケ。 （内面）ヨコナデ。		第Ⅳ様式
66	弥生土器	甕	近江系	SK32	口　径　12.0 残存高　3.0	（形態）外反する頸部に、上方に立ち上がる口縁部を持つ。受口状口縁。 （外面）摩滅が激しいが、頸部は縦位ハケ。 （内面）端部はヨコナデで、その下方は横位ハケ。		第Ⅳ様式
67	弥生土器	細頸壺		SK32	口　径　8.9 残存高　3.3	（形態）外半気味に上方に伸びる頸部から、内湾気味に立ち上がる口縁を持つ。 （外面）端部はヨコナデ。頸部は縦位ハケ。 （内面）ヨコナデ。	ゆがみ有り	第Ⅳ様式

表５－７　遺物観察表

No.	種類	器種	系統	遺構名	法量（cm）	調整・文様	備考	時期
68	弥生土器	高杯		SK32	底　径　10.0 残存高　6.3	（形態）下方へ強く開く高杯の脚部。 （外面）縦位ハケ。 （内面）粗付近は横位ハケ。		第Ⅲ～Ⅳ様式
69	弥生土器	鉢	搬入品か？	SK32	口　径　35.9 残存高　5.6	（形態）胴部から口縁部にかけて緩やかに内湾しながら立ち上がる。上部に面を持つ。 （外面）口縁上部の面を持っているところに円形浮文、口縁部に横位の貼付突帯を2条、その後突帯をつなぐように縦位の棒状浮文。胴部は右上がりハケ。 （内面）ナデ。	搬入品か？	第Ⅲ～Ⅳ様式
70	弥生土器	壺		SK32	底　径　6.0 残存高　3.3	（形態）壺の底部。分厚い底部に、急激に外反しながら体部が立ち上がる。 （外面）縦位ハケ。 （内面）小片の為不明瞭であるが、指頭圧痕に横位の工具痕（？）が確認できる。		第Ⅲ様式
71	弥生土器	壺（？）		SK32	底　径　5.2 残存高　2.6	（形態）壺（？）の底部。 （外面）左上がりハケ。 （内面）摩滅の為調整は不明瞭。		第Ⅲ様式？
72	弥生土器	壺（？）		SK32	底　径　5.4 残存高　3.2	（形態）壺（？）の底部。底部から急激に外反しながら体部が立ち上がる。 （外面）左上がりハケ。 （内面）左回りの放射状ハケ。	底部に木葉の痕。	第Ⅲ様式
73	弥生土器	甕（壺）		SK32	底　径　7.1 残存高　3.2	（形態）甕（壺）の底部。 （外面）縦位ハケ。 （内面）ナデ。		第Ⅲ様式？
74	弥生土器	甕		SK32	底　径　7.0 残存高　5.4	（形態）甕の底部。 （外面）縦位のハケ。 （内面）上方向のヘラケズリ		第Ⅳ様式？
75	弥生土器	壺（甕）	近江系	SK32	底　径　3.5 残存高　3.1	（形態）壺（甕）の底部。底部から斜め上方にまっすぐ立ち上がる。 （外面）左上がりハケ。 （内面）底部に工具（？）痕が確認できる。		第Ⅲ様式
76	弥生土器	甕（？）		SK32	底　径　3.1 残存高　3.7	（形態）甕（？）の底部。 （外面）縦位ハケ。 （内面）ナデ。		第Ⅲ様式
77	弥生土器	甕	近江系	SK97	口　径　26.0 残存高　2.5	（形態）口縁部外面はやや段をつける口縁を持つ。 （外面）Ⅱ縁部は横位ハケ。頸部は縦位ハケ。 （内面）横位ハケ。		第Ⅲ様式
78	弥生土器	甕	近江系	SK97	口　径　20.0 残存高　2.8	（形態）頸部から外反しながら開く口縁部を持つ。 （外面）口縁端部に凹突文。頸部に縦位ハケ。 （内面）口縁部に櫛描波状文（3～4本/0.8cm）3帯。		第Ⅲ様式
79	弥生土器	甕	近江系	SK97	底　径　7.0 残存高　2.7	（形態）甕の底部。底部から斜め上方に立ち上がる。 （外面）縦位ハケ。 （内面）小片の為調整は不明瞭。		第Ⅲ～Ⅳ様式
80	弥生土器	壺		SK97	底　径　6.9 残存高　2.9	（形態）壺の底部 （外面）縦位ハケ。 （内面）小片の為調整は不明瞭。		第Ⅲ～Ⅳ様式
81	弥生土器	甕		SK154	口　径　16.0 残存高　4.3	（形態）くの字状口縁。Ⅱ縁端部が肥厚する。 （外面）口縁部から頸部はヨコナデ。胴部上半はタタキ後、縦位ハケ。 （内面）Ⅱ縁部から頸部はヨコナデ。胴部上半は横位ハケ。	82と同一個体か？	第Ⅳ様式
82	弥生土器	甕		SK154	口　径　15.1 残存高　4.2	（形態）くの字状口縁。口縁端部が肥厚する。 （外面）口縁部から頸部はヨコナデ。胴部上半はタタキ後、縦位ハケ。 （内面）口縁部から頸部はヨコナデ。胴部上半は横位ハケ。	81と同一個体か？	第Ⅳ様式
83	弥生土器	甕	近江系	SK154	口　径　26.0 残存高　2.4	（形態）外反する頸部に、上方に立ち上がる口縁部を持つ。受口状口縁。 （外面）摩滅の為調整は不明瞭。 （内面）摩滅の為調整は不明瞭。		第Ⅳ様式

表5－8　遺物観察表

No.	種類	器種	系統	遺構名	法量（cm）	調整・文様	備考	時期
84	弥生土器	高杯		SK154	底　径　13.0 残存高　3.8	（形態）高杯の脚部。 （外面）摩滅の為調整は不明瞭。 （内面）ヨコナデ。		第Ⅳ様式
85	弥生土器	甕	近江系	SK168	口　径　20.0 残存高　1.5	（形態）緩やかに外反する口縁部を持つ。 （外面）口縁端部にキザミ。口縁部は左上がりハケ。 （内面）摩滅の為調整は不明瞭。		第Ⅱ～Ⅲ様式
86	弥生土器	広口壺		SK168	口　径　20.0 残存高　2.1	（形態）外反しながら伸びる頸部がほぼ水平に広がって口縁部となる。口縁端部は下方にやや垂下し、外面に面を持つ。 （外面）摩滅の為調整は不明瞭。 （内面）摩滅の為調整は不明瞭。		第Ⅳ様式
87	弥生土器	壺 広口壺	近江系	SK168	口　径　30.2 残存高　4.1	（形態）外反する頸部に、上方に立ち上がる口縁部を持つ。 （外面）口縁部左上がりハケ。頸部は左上がりハケ。 （内面）口縁端部はヨコナデ。口縁部は横位ハケ。		第Ⅳ様式
88	弥生土器	高杯		SK168	口　径　18.0 残存高　2.2	（形態）杯部の口縁部に「上」字形のつばがつく。 （外面）口縁端面に3条の凹線文。摩滅の為調整は不明瞭。 （内面）摩滅の為調整は不明瞭。		第Ⅳ様式
89	弥生土器	有段口縁壺		SK173	口　径　22.8 残存高　16.9	（形態）外反気味の頸部に、上方に立ち上がる口縁部を持つ。 （外面）口縁部の上下に2条の凹線文。頸部に櫛描列点文のある貼付突帯。頸部から胴部上半にかけての調整は、タタキ後右上がりハケ。 （内面）口縁部は横位ハケ後、ヨコナデ。		第Ⅳ様式
90	弥生土器	壺		SK173	口　径　14.0 残存高　3.6	（形態）頸部で屈曲後、短く立ち上がる口縁部を持つ。端部に面を持つ。 （外面）口縁部はヨコナデ。頸部から胴部上半は縦位ハケ。 （内面）口縁部はヨコナデ。		第Ⅳ様式
91	弥生土器	壺		SK173	口　径　14.0 残存高　4.5	（形態）くの字状口縁。口縁端部に面を持つ。 （外面）口縁端部に1条の凹線文。口縁部はヨコナデ。頸部から胴部上半は縦位ハケ。 （内面）口縁部はヨコナデ。胴部上半はナデ。		第Ⅳ様式
92	弥生土器	壺		SK173	口　径　18.0 残存高　3.6	（形態）頸部で屈曲後、短く立ち上がる口縁部を持つ。端部に面を持つ。 （外面）摩滅の為調整は不明瞭。 （内面）摩滅の為調整は不明瞭。		第Ⅳ様式
93	弥生土器	壺	近江系	SK173	口　径　19.0 残存高　2.6	（形態）外反する頸部に、上方に立ち上がる口縁部を持つ。受口状口縁。 （外面）口縁部外面に櫛描列点文。頸部はヨコナデ。 （内面）口縁部はヨコナデ。		第Ⅳ様式
94	弥生土器	壺	近江系	SK173	口　径　16.0 残存高　3.1	（形態）外反する頸部に、上方に立ち上がる口縁部を持つ。受口状口縁。 （外面）口縁部外面はやや左上がりの横位ハケ。頸部はヨコナデ。 （内面）口縁部はヨコナデ後、刺突列点文。		第Ⅳ様式
95	弥生土器	壺		SK173	底　径　8.7 残存高　7.5	（形態）壺の底部。底部から斜め上方にまっすぐ立ち上がる。 （外面）下方向のヘラケズリ後、左上がりハケ。 （内面）ハケ後、ナデ。		第Ⅳ様式
96	弥生土器	壺		SK74	底　径　7.0 残存高　3.1	（形態）壺の底部。底部から斜め上方にまっすぐ立ち上がる。 （外面）左上がりハケ。 （内面）小片の為調整は不明瞭。		第Ⅲ～Ⅳ様式
97	弥生土器	壺		SK74	底　径　4.9 残存高　1.7	（形態）壺の底部。 （外面）縦位ハケ。 （内面）小片の為調整は不明瞭。		第Ⅲ～Ⅳ様式

表5－9　遺物観察表

No.	種類	器種	系統	遺構名	法量（cm）	調整・文様	備考	時期
98	弥生土器	壺	近江系	SK155	口　径　22.6 残存高　4.3	（形態）頸部から大きく外反する口縁部で、山形の稜をもつ波状口縁を呈している。 （外面）口縁部は有上がりハケ。頸部は縦位ハケ。 （内面）口縁部から頸部は横位ハケ。		第Ⅱ様式
99	弥生土器	鉢		SK155	口　径　24.0 残存高　3.2	（形態）胴部から斜め上方に立ち上がり、更に外方に開く口縁部を持つ。 （外面）口縁部はヨコナデ後、端部下端にキザミ。胴部は横位ハケ。 （内面）口縁部はヨコナデ。胴部は横位ハケ。		第Ⅳ様式
100	弥生土器	壷		SK155	底　径　5.0 残存高　2.9	（形態）壷の底部。底部から緩やかに外反しながら立ち上がる。 （外面）横位ハケ。 （内面）ナデ。	底部に木葉の痕。	第Ⅲ様式
101	弥生土器	壷		SK173	底　径　5.0 残存高　3.2	（形態）壷の底部、底部から外反しながら立ち上がる。 （外面）縦位ハケ。 （内面）ナデ。		第Ⅲ～Ⅳ様式
102	弥生土器	鉢		SK175	口　径　24.0 残存高　2.8	（形態）上方に立ち上がる口縁部を持つ。端部は肥厚し上方に面を持つ。 （外面）口縁部に2条の凹線文。摩滅の為調整は不明瞭。 （内面）摩滅の為調整は不明瞭。		第Ⅳ様式
103	弥生土器	広口壺（？）		SK175	口　径　18.0 残存高　3.8	（形態）外反する頸部から口縁部をもち、口縁端部をやや上方に挟み上げている。 （外面）口縁部に1条の凹線文。 （内面）摩滅の為調整は不明瞭。		第Ⅳ様式
104	弥生土器	有段口縁壺	近江系	SK139	口　径　29.8 残存高　5.3	（形態）外反気味の頸部に、上方に立ち上がる口縁部を持つ。 （外面）口縁部は横位ハケ。頸部から胴部上半にかけては縦位ハケ後、頸部のみヘラケズリ。 （内面）口縁部から頸部にかけては左上がりハケ後、口縁部のみ横位ハケ。胴部上半は横位ハケ。		第Ⅱ様式
105	弥生土器	壷	近江系	SK114	口　径　20.0 残存高　2.6	（形態）口縁部外面はやや段をつける口縁を持つ。 （外面）口縁部は横位ハケ。頸部は縦位ハケ。 （内面）横位ハケ。		第Ⅲ様式
106	弥生土器	鉢	近江系	SD151	口　径　24.0 残存高　2.6	（形態）胴部から斜め上方に立ち上がり、更に外方に開く口縁部を持つ。 （外面）口縁端部下端に刺突文。口縁部はヨコナデ。 （内面）胴部上半は横位ハケ。		第Ⅲ様式
107	弥生土器	広口壺	近江系	SK22	口　径　16.0 残存高　3.0	（形態）外反しながら開く口縁を持つ。 （外面）口縁端部に刺突列点文。口縁端部下端に刺突文。口縁部はヨコナデ。 （内面）口縁部に山形文。		第Ⅳ様式
108	弥生土器	細頸壺（？）		SK174	口　径　10.0 残存高　3.5	（形態）外反気味の頸部に、上方に立ち上がる口縁部を持つ。 （外面）摩滅の為調整は不明瞭。 （内面）ヨコナデ。		第Ⅳ様式
109	弥生土器	有段口縁壺		包含層	口　径　32.0 残存高　4.0	（形態）やや外反する頸部から、ほぼ垂直に立ち上がる口縁部を持つ。 （外面）口縁部はヨコナデ後、口縁下端にキザミ。 （内面）口縁部はヨコナデ。		第Ⅳ様式
110	弥生土器	鉢		SK92	口　径　36.0 残存高　10.8	（形態）胴部から口縁部にかけて、緩やかに内湾しながら立ち上がる。 （外面）口縁部に3条の凹線文。胴部は右上がりハケ。 （内面）口縁部はナデ。胴部は左上がりハケ。		第Ⅳ様式
111	弥生土器	鉢（？）		SK126	口　径　24.0 残存高　2.0	（形態）鉢（？）の口縁部。上方に立ち上がる口縁を持つ。 （外面）口縁部に3条の凹線文後、縦位の直線文（残存部では6本確認）。 （内面）ヨコナデ。		第Ⅳ様式

表５－10　遺物観察表

No.	種類	器種	系統	遺構名	法量（cm）	調整・文様	備考	時期
112	弥生土器	壺		SK149	底　径　6.8 残存高　2.6	（形態）壺の底部。底部から緩やかに外反しながら立ち上がる。 （外面）縦位ハケ。 （内面）ハケ。		第Ⅲ様式？
113	弥生土器	壺		SP2	底　径　8.7 残存高　2.1	（形態）壺の底部。 （外面）ナデ。 （内面）摩滅の為調整は不明瞭。		第Ⅲ～Ⅳ様式
114	弥生土器	壺		SK171	底　径　5.0 残存高　4.2	（形態）壺の底部。底部から斜め方向にまっすぐ立ち上がる。 （外面）摩滅の為調整は不明瞭。 （内面）摩滅の為調整は不明瞭。		第Ⅳ様式？
115	縄文土器	注口土器		SK153	残存高　5.6	（形態）注口と胴部の付け根。 （外面）ナデ （内面）ナデ		
116	石器	磨製石斧		包含層	最大長　6.7 最大幅　4.2 最大厚　2.3	刃部が欠損している。	重量120g	
117	石器	砥石		SK32	最大長　7.6 最大幅　4.6 最大厚　3.3	長軸の両サイドが欠損している。	重量132g	
118	石器	砥石		包含層	最大長　9.6 最大幅　8.4 最大厚　3.8	長軸面全てに擦痕が確認できる。	重量204g	
119	石器	砥石		SD1	最大長　6.9 最大幅　4.9 最大厚　2.6	全ての面で擦痕が確認できる。	重量112 g	
120	石器	石鏃		SK116	最大長　3.0 最大幅　2.0 最大厚　0.25	刃部が直線的、平面三角形状。	重量0.9g 安山岩	
121	石器	磨製石鏃		SD1	最大長　4.7 最大幅　2.7 最大厚　0.7	中央に鎬を有し、磨製石剣と考えられるが、先端部と基部が欠損している。鎬の入り方から、基部に近い部分であると推測される。	重量12 g	
122	中世土師器	皿		SK22	口　径　9.8 器　高　2.1	（形態）底部より緩やかに立ち上がる口縁。 （外面）口縁部に2段のヨコナデ。 （内面）ナデ		
123	中世土師器	皿		SK22	口　径　14.8 器　高　2.9	（形態）底部より緩やかに立ち上がる口縁。 （外面）口縁部に2段のヨコナデ。 （内面）ナデ		
124	中世土師器	皿		SK22	口　径　16.8 残存高　2.1	（形態）底部より緩やかに立ち上がる口縁。 （外面）口縁部に1段のヨコナデ。 （内面）ナデ		
125	黒色土器	皿		SK22	口　径　10.6 底　径　6.2 器　高　2.4	（形態）底部より緩やかに立ち上がる口縁。 （内外面）口縁部外面に1段のヨコナデ。内外面とも黒化処理・ミガキ。		
126	黒色土器	椀		SK22	口　径　14.7 残存高　4.6	（形態）黒色土器 （内外面）口縁部外面に1段のヨコナデ。内外面とも黒化処理・ミガキ。		
127	黒色土器	椀		SK22	口　径　15.7 底　径　5.9 器　高　5.5	（形態）黒色土器 （内外面）口縁部外面に1段のヨコナデ。内外面とも黒化処理・ミガキ。		

Ⅳ　おわりに

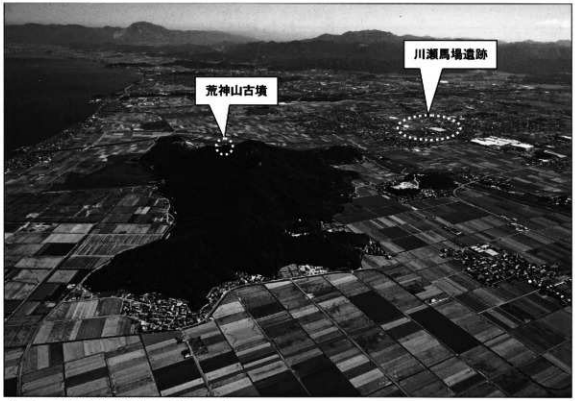
今回の調査は、川瀬馬場遺跡における４度目の発掘調査であった。調査地は市１次調査地と市２次調査地の間に位置しており、調査範囲は集合住宅の建物部分約450㎡であった。これまで３度の調査では弥生時代中期中葉から後葉の集落を確認しているが、今回の調査でも全域で同時期の遺物・遺構を確認した。弥生時代以外の遺構はわずかにSK22のみであった。

検出した遺構は、掘立柱建物、土坑、柱穴、溝であった。調査区全域で遺構を確認できたものの、遺構面の地山が砂質化する調査区南西部ではやや遺構密度が減少する傾向が見られた。掘立柱建物については、多数の柱穴と考えられる土坑を検出したものの、建物プランの復原ができたのはわずかに６棟であった。ただし、柱穴が検出できなかった所や建物プランが調査区の外側に伸びる可能性も考えられるため、今回復原した以上の建物があった可能性は高い。溝は、大小数本確認した。調査区中央部南東壁沿いに検出したSD１は、SB３と平行する形で直線的に伸びる溝で、長さ約15m、最大幅約80cm、深さ約35cmを測る。今回の調査で最も纏まった量の遺物を出土した遺構である。土坑も、多数検出した。柱穴の可能性のある土坑は、調査区全域で検出され、中には柱根が残存しているもの（SK68・SK93・SK100・SK119・SP133・SK159）も確認された。調査区の南西部では、断面形態が緩やかな椀状を呈しており、遺構深度が非常に浅い遺構（SK15・SK23・SK24・SK32・SK195）が検出されている。遺構の性格などは不明であるが、SK32で纏まった量の遺物を出土している。また、SD１を切る形で検出されたSK22は、中世土師器・黒色土器を伴っており、今回の調査区で確実に弥生時代以降の唯一の遺構である。

出土遺物は、各遺構から出土しているが、SD１、SK32で纏まった量の遺物が出土している。今回の調査も、過去３度の調査成果同様、弥生時代中期中葉から後葉の遺物が大半であった。しかし、それら中期土器の内訳を詳細に見ると、これまでの調査では出土遺物の８割～９割程度が第Ⅳ様式に属し、残りが第Ⅲ様式に属すという傾向であった。しかし、今回の調査では、SK32など第Ⅲ様式の比率が高い遺構も確認されており、出土遺物全体で見ても、これまでの調査より第Ⅲ様式の比率が高いということができる。更に、一部第Ⅱ様式の可能性のある遺物も確認されている。これらの出土傾向の違いは、川瀬馬場遺跡の弥生集落の存続時期を再検討する上で重要な成果と言えよう。

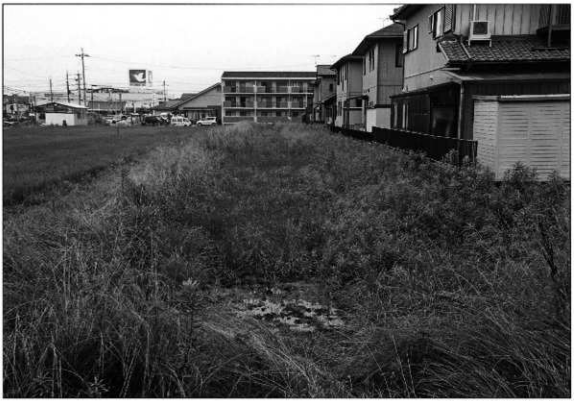
〔参考文献〕

滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会　1984『馬場遺跡発掘調査報告書』
彦根市　2007『新修彦根市史』第１巻通史編　古代・中世
彦根市教育委員会　1988『馬場遺跡』彦根市埋蔵文化財調査報告第15集
彦根市史考古部会　2004「馬場遺跡出土の弥生時代遺物」『『新修彦根市史』編さんにともなう彦根市内遺跡・遺物調査報告書』



上空より川瀬馬場遺跡を望む〔南西より〕

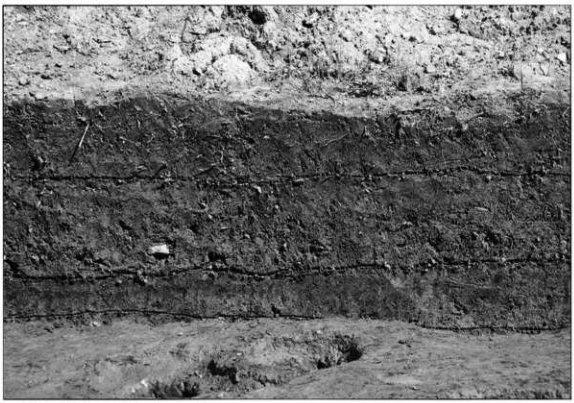
調査地遠景〔山崎山城跡より〕



調査前風景〔南西より〕

調査区完掘状況〔南西より〕

調査区完掘状況〔北東より〕



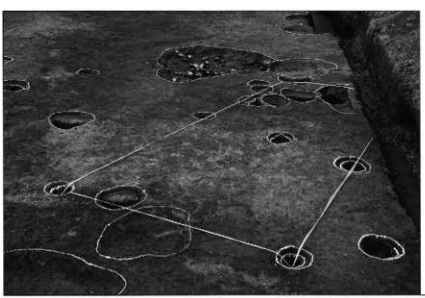
基本土層〔柱状図３地点：北西より〕

調査区完掘状況〔北東より〕

南西区完掘状況〔北東より〕

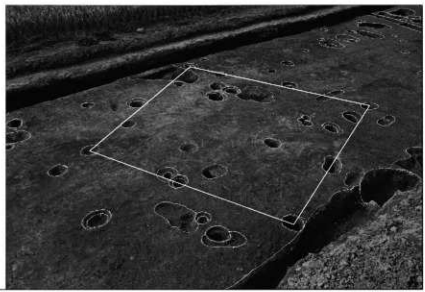
北東区完掘状況〔南西より〕

掘立柱建物（SB１・２）
〔北東より〕



掘立柱建物（SB２）
〔南西より〕

掘立柱建物（SB３）
〔南東より〕



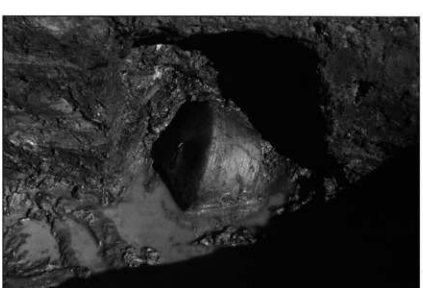
掘立柱建物（SB４）〔南より〕

掘立柱建物（SB５・６）〔南より〕

溝（SD１）〔北東より〕

溝(SD１)内遺物出土状況１
〔北西より〕

溝(SD１)内遺物出土状況２
〔南西より〕



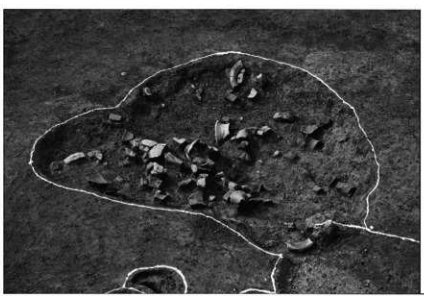
溝(SD１)内遺物出土状況３
〔西より〕

溝(SD１)内遺物出土状況４
〔西より〕

溝(SD１)内遺物出土状況５
〔西より〕

溝(SD１)土層断面(b地点)
〔南西より〕

土坑（SK32）土層断面
〔南西より〕



土坑（SK32）内遺物出土
状況１〔南西より〕

土坑（SK32）内遺物出土
状況２〔南西より〕

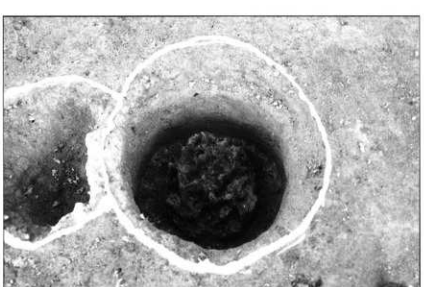
土坑（SK168）土層断面〔南西より〕

土坑（SK168）内遺物出土状況〔南西より〕

土坑（SK22）内遺物出土状況〔北西より〕

柱根（SK93）〔南東より〕

柱根（SK100）〔南東より〕



柱根（SP133）〔西より〕

柱根（SK93）断ち割り状況
〔南西より〕

柱根（SK100）断ち割り状況
〔南東より〕

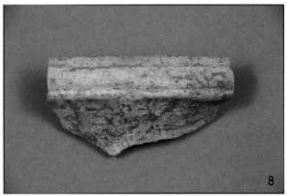
柱根（SP133）断ち割り状況
〔西より〕

子ども発掘体験の様子

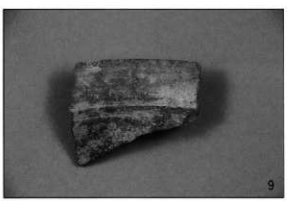
子ども発掘体験参加者

図版四一

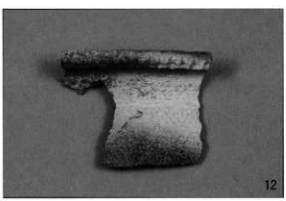
SD 1



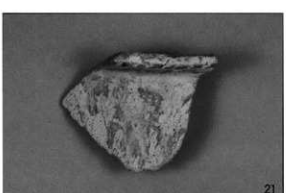
SD 1



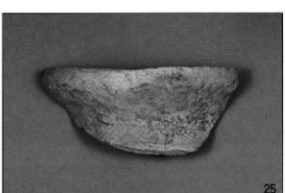
SD 1



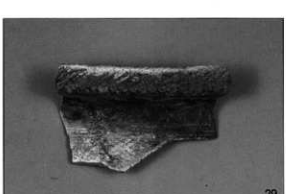
SD 1



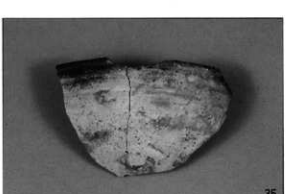
SD 1



SD 1



SD 1



SD 1

SD 1

SD 1

SD 1

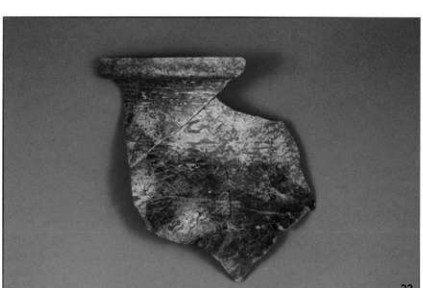
SD 1　19

SD 1　20

SD 1　23

26 SD 1

28 SD 1



33 SD 1

SD 1　31

SD 1　32

SD 1　36

SD 1

SD 1

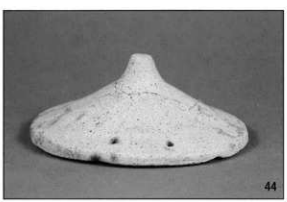
SD 1

SD 1

SD 1

SD 1

SD 1

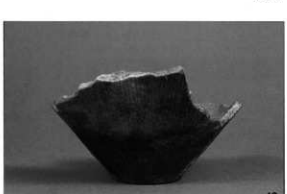


SD 1

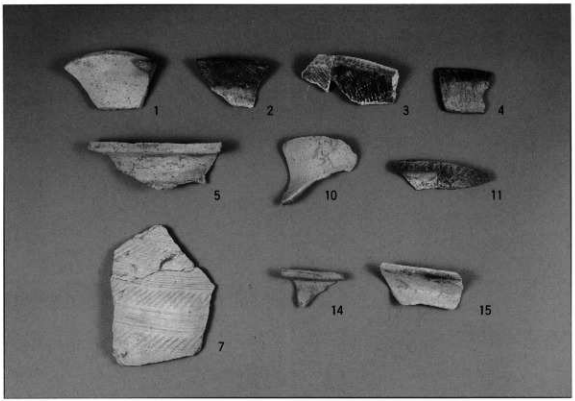
SD 1

SD 1

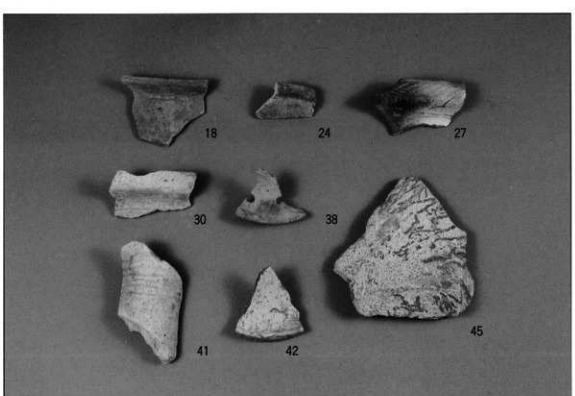
SD 1



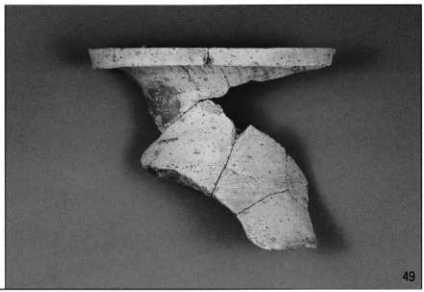
SD 1



SD 1



SD 1



SK23 49

SK23 50

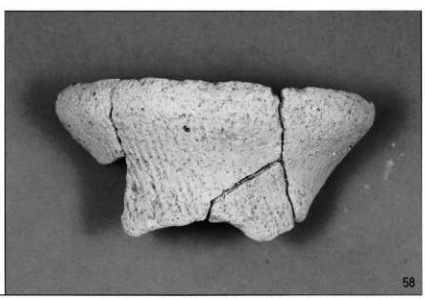
SK23 51

52 SK23

53 SK32

54 SK32

SK32 57

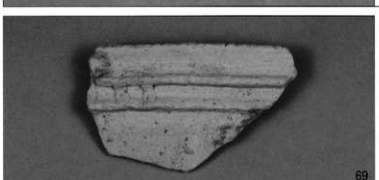


SK32 58

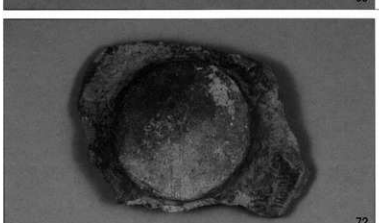
SK32 59

SK32

SK32

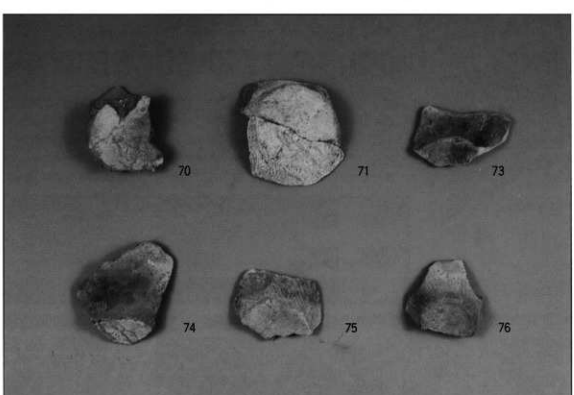


SK32



SK32

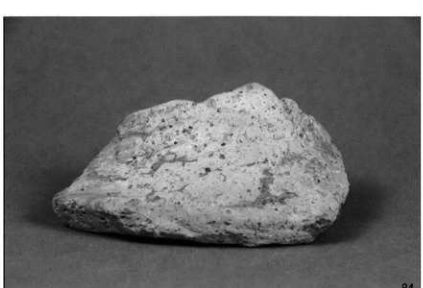
SK32



SK32

SK154

SK154

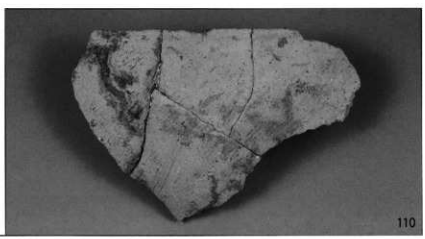


SK154

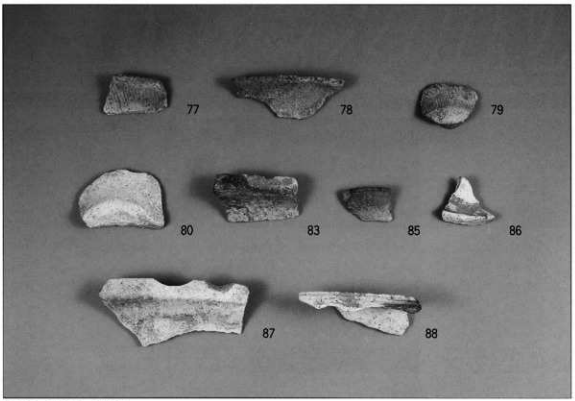
SK173

SK173

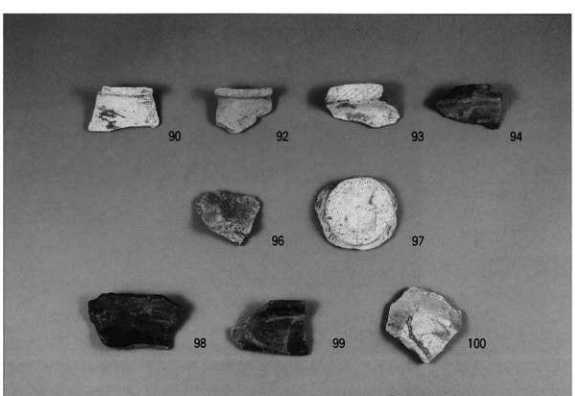
SK173



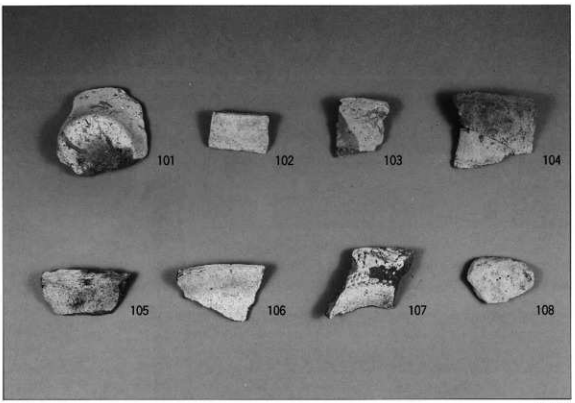
SK92



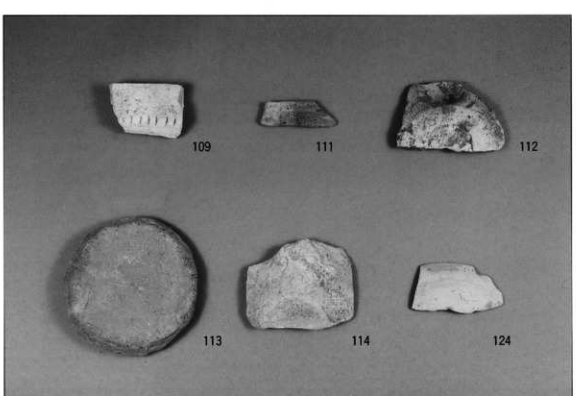
SK97・SK154・SK168



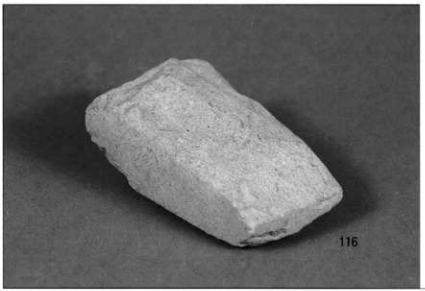
SK173・SK74・SK155



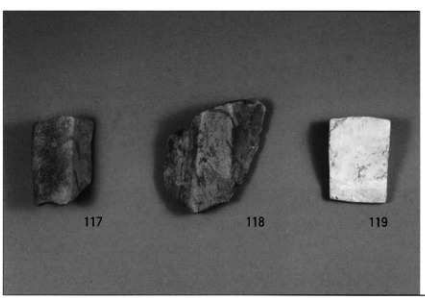
各遺構



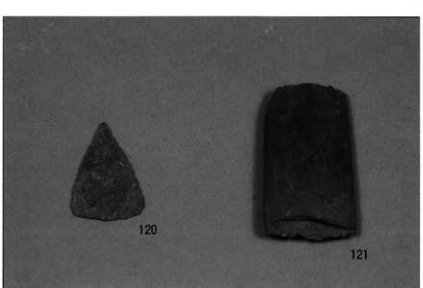
各遺構



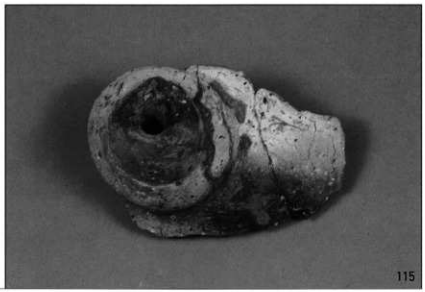
包含層



117：SK32
116：包含層
119：SD 1



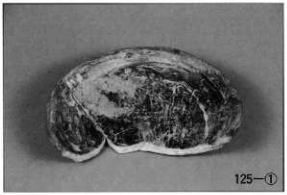
120：SK116
121：SD 1



SK153 115

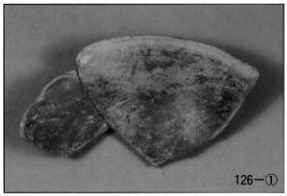
SK22 122

SK22 123



SK22

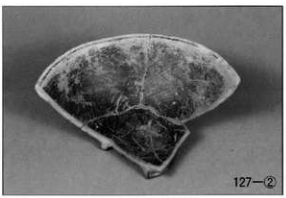
SK22



SK22

SK22

SK22



SK22

SK22

報告書抄録

ふりがな	かわせばばいせき
書名	川瀬馬場遺跡Ⅲ
副書名	集合住宅建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査事業
巻次	
シリーズ名	彦根市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	47
編著者名	林　昭男
編集機関	彦根市教育委員会　文化財部　文化財課
所在地	〒522-0001　彦根市尾末町１番38号　℡0749-26-5833
発行年月日	20110331　平成23年（2011年）３月31日

所収遺跡	所在地	コード		世界測地系		調査面積	調査期間	調査原因
		市町村	遺跡番号	北緯	東経			
川瀬馬場遺跡	彦根市 川瀬馬 場町 1007-1	25202	116	35度 14分 32秒	136度 14分 41秒	450㎡	20090721 ～ 20090831	集合住宅 建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
川瀬馬場遺跡	集落	弥生時代 中世	掘立柱建物 溝 土坑	弥生土器・木器（柱根）・石器（石鏃・石斧・砥石・石剣）中世土師器・黒色土器	掘立柱建物のみで構成される集落

彦根市埋蔵文化財調査報告第47集

川瀬馬場遺跡Ⅲ

―集合住宅建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査事業―

平成23年（2011年）３月発行

編集・発行：彦根市教育委員会
文化財部文化財課
彦根市尾末町１番38号
℡0749-26-5833

印刷・製本：サンメッセ株式会社
滋賀県彦根市小泉町30番地９
℡0749-21-3211

SITE OF KAWASEBABA

March, 2011

Hikone Educational Bureau
Cultural Asset Division